

---

# 剣の民と華の少女

夕闇夜空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

剣の民と華の少女

### 【Nコード】

N2795Z

### 【作者名】

夕闇夜空

### 【あらすじ】

大陸に八の国があり八の王がそれぞれ管理する。しかし、十年前の戦いで一国が滅び、今は七国。大陸は北西から南にかけて海が広がって北から東には山脈が広がり、東南には広大な砂漠というそんな世界。

傭兵のレオはある国の王都である少女を助ける事で世界が動き出す。剣を頼りに生きる少年の異世界ファンタジー。

## 第一話 剣の少年（前書き）

レオという主人公がなんやかんやで国を救う主人公最強ご都合主義物語です。

新参者でしかも初めて書いた作品で見苦しいかもしれませんが読んで頂けると幸いです。

注：誤字脱字があるかもしれません。

## 第一話 剣の少年

全てが焼け、壊され、砕かれ、地獄と化していた。  
何故こうなったのは自分でもわかっていない。

自分の近くには沢山の死体が転がっていた。近衛騎士のリカルナ、侍女のリアーナ、庭師のカール、弟のサイト、執事のフレデリック。

ここは地獄なのか？

その疑問に伝えてくれる者はもう誰も居ない。

呆然と立ち竦んでいるとリカルナの最期の言葉を思い出した。

『逃げて下さい!!!』

その言葉を実行するために、脱出用の地下通路から逃げ出した。

物語を語る前にこの世界の事を話そう。

この世界は魔法が存在し、科学がそれなりに発展した夢のような世界だ。

ただ残念な事に飛行機や戦車、銃などの近代兵器は一切無い。  
そのため物語の舞台はとある一つの大陸だ。

この大陸は八つの国を八人の王がそれぞれを治めて平和が続いていた。というのは、今は昔。

現在は十年前に起きた戦争により、一つの国が滅ぼされ、七つの国がこの大陸で鎬を削っている。

第一の国、ティルナノーク王国。

第二の国、神聖ティリア王国。

第三の国、レグリクス連合国。

第四の国、アルゼス王国。

第五の国、ヴァルキュリア公国。

第六の国、プログレス王国。

第七の国、ヘルヘイム帝国。

十年前まではここに第八の国としてティルヴィング王国があったが、ヘルヘイム、アルゼス、プログレス、ヴァルキュリアの連合軍によって滅ぼされた。

これをティルヴィング滅亡戦と言い、それを機に大陸中を巻き込んだ冷戦が始まった。

この物語はそんな時代の中にあるティルナノグ王国での出来事を綴った物だ。

何処までも空という物をあなたはどれだけ見た事があるだろうか。今、漆黒の髪をした彼……レオンハルトが見ているのはそんな空だった。

「はあ」

レオンハルト、通称レオは退屈そうに溜め息を吐いた。

彼が何故そんなに退屈そうにしているかという……。

「神聖ティリア王国から歩いて一カ月。……流石に飽きたな」

というのが理由だった。

レオは今、ティルナノグ王国の王都ガリレクスに徒歩で向かっている。

通常、ティルナノグとティリアがいくら隣国だからといっても徒歩で移動する距離ではない。

良くて蒸気機関車、悪くても馬車で移動するのが一般的だ。

因みに、蒸気機関車は乗るのにレオの年収五年分が必要なので無理であった。

「割のいい仕事だからって無茶しすぎたか？」

レオは傭兵だ。

傭兵には独自のネットワークがあり、レオは同じ傭兵の仲間から割のいい仕事を紹介してもらったのだ。

しかし、その仕事は依頼主の都合で前金が貰えず、レオは仕方無く節約しながら目的地のガリレクスを目指している。

「どこまで行けど街は見えず」

もう一度溜め息を吐いて足を止めた。

「ん？」

足を止めたおかげでレオはある事に気がついた。

それは雨や風のせいで腐り落ちた看板だった。

「ガリレクスまで残り二キロ」

その後、歩き出したレオの足取りはさっきと比べ、幾分か軽やかなモノになっていた。

「やっと着いたあゝ」

レオはベッド以外窓しか無い木造の部屋で脱力感の漂う声をあげた。

部屋の窓は建て付けが悪いらしくガタガタと音を立てて揺れている。

何故、こんなボロ部屋に泊まっているかというと、やはりお金が無いからだ。

倒れ込むようにレオはベッドに寝転んだ。

「一カ月振りのベッドだ」

余程疲労が溜まっていたのだろう、それからレオが深い眠り付くまでそう時間はかからなかった。

六時間後。

「ふあゝゝ」

秋のこの時期には夜と言ってもいい時間にレオは己の空腹感で

目が覚めた。

まだ寝ぼけているのだろう、レオはふらつきながらモカバンからコートを取り出して羽織り、宿からソソソと出て行った。

「……眠っ、腹減った」

そんな愚痴を言いながらもレオは街を歩き回り、地形を頭の中に叩き込んでいた。

これは万が一の為に逃げ道の確認や戦闘に陥った時の地理の利を活かす為に必要な行動だった。

しかし、今日は運が悪かったらしい。

「イヤッ、離してっ！！」

「大人しくしろよ。怪我したくねえだろう？」

表の通りから外れて裏路地を散策していると奥にチンピラのような男達が一人の女の子を囲んでいた。

レオはどうするか一瞬だけ迷ったが、真っ直ぐとチンピラ達の方に歩いて行った。

「へへっ、こちら辺は幾ら助けを呼んだって来ねーよ」

「大人しく俺らと遊ぼうや」

粘ついた気持ち悪い声にレオは眉をひそめた。

「誰があなた達なんかとっ！！」

少女は近付いて来る男が余程嫌だったのだろう。彼女は力一杯の平手打ちをチンピラに浴びせた。

その音でさっきまで騒いでいたチンピラが一斉に静まり返った。

「……てえ、いてえなこのクソアマー！！」

叩かれたチンピラは怒りのあまり声を荒げて腰に付けた短剣を抜き、少女の首元に押し付けようとした。

マズい。

そう思ったレオの反応は一瞬だった。

レオは五メートルの距離を一秒の半分以下の時間で詰め、男の短剣を持っている腕を背中側に回して骨を外した。

ゴキーン、と嫌な音が鳴って男は地面にのたうち回った。

「ぎゃあああああ!!」

レオは同時に男達と少女の間に体を入れてチンピラを牽制する。  
「え?」

少女は訳の分かんないという顔をして目を丸くした。

それは他のチンピラ達もそうだった。彼等は仲間がやられたのに思考が追いつかず、呆けた顔でレオを見返すだけだった。

数秒間の沈黙。

「……て、てめえ何だ!？」

一人が声を出すと周りのチンピラも汚い言葉で罵倒してくる。

レオはくだらないと溜め息を吐き、どうしようかと考えた。

考え無しで乱入したしなあ。とりあえず、全員気絶してもらうか。

考えをまとめたレオが行動を起こそうと脚に力を込めるのと同じ時に後ろから声がかかった。

「私はいいから逃げて。あなたまで怪我しちゃう!!」

相手を気遣って言った言葉だったのだろうが、返事をレオがする前に彼女の台詞が戦いの合図になったようだ。

「うおりゃあ!!」

レオの一番近くに居たチンピラが意味の無い雄叫びを出しながら殴りかかってくる。

「危なっ」

い、と言う少女の声の前にレオは拳を途中で掴んでチンピラを投げ飛ばした。

チンピラは地面に強く背中を打ち付けられ、蛙の鳴き声のような声をあげて意識を失った。

普通、訓練を受けた事のある兵士なら受け身をとって気絶まではしない筈だ。

「な、なめんな!!」

「食らいやがれ!!」

そう叫びながら残ったチンピラ達が一挙に襲いかかって来る。



しかし、レオの対応は冷静だった。

ある男は投げ飛ばされ。

「ぎゃつ!?!」

ある男は殴り飛ばされ。

「ぐふう」

ある男は蹴り飛ばされた。

その後も相手の攻撃をいなしながら続け様に残る二人の意識を刈り取った。

それで乱闘は終わりを告げた。

「ふう、コレで終わりか？」

辺りを眺めてまだ動けるか探したが、意識を取り戻した男はいない。

レオは医者を呼ぼうか迷ったが、面倒だと思っただし、相手の自業自得だと考えて少女の方へ向き直った。

「大丈夫か？」

「え、あ……はい」

そこにはまるで絵画の中から出てきたような美少女が薄い桜色の肩まである髪をいじりながら驚いた顔をしていた。

「怪我とかは無い？」

「だ、大丈夫だと思う。どこも痛くないし」

癖なのだろう。彼女は指で髪をクルクルと回しながら質問に答える。

レオはその答えを聞くと、回れ右をして来た道を引き返そうとする。

その行動を少女は慌てて止める。

「ま、待って」

早く散策を終わらして晩飯にありつきたいレオは内心少しだけ不機嫌になりながら振り返る。

この時、レオは少女の地味だが仕立ての良い服を見て彼女が上流階級の間人だと思い、あまり関わりたくないと考えたのも帰ろう

とした理由でもあった。

「名前なんていうの？」

少女は少し怖がりながら勇気を振り絞って質問をした。

怖がるなら呼び止めないで欲しい、と思ったレオだったが、ここで不機嫌になって相手を怯えさせるのは得策ではないと考え、なるべく優しい声色で答える。

「レオンハルト」

そう答えた瞬間、少女の顔に花が開いた……無論、比喩的な意味だが。彼女は満面の笑みを浮かべる。

その表情にレオは自分の心拍数が上がるのを感じた。

「じゃあレオね。私はリア、よろしく」

「ああ、よろしく。リア」

そのまま踊り出しそうになっているリアにレオは一つ提案をする。

「ここだといつコイツ等が起きるか分からないから表に出よう」

表とは表通りの事だ。表通りは夜中まで賑やかなので襲われる心配が無いからだ。

リアはまるで水辺で遊んでいるかのようにチンピラ達をジャンプしてレオの前までやってくる。

「もちろん。助けてくれたお礼にご飯奢るわ」

振り返ったリアの笑顔に再びレオの心拍数が急上昇した。

リアがレオを誘って入ったレストランは街中でも相当値段の高い高級店だった。

「こういう所久しぶりだから緊張するな」

レオは情けなくそう呟く。

「そう？　気楽にしてればいいと思うけど」

「無理。貧乏人を甘く見るなよ」

「言つてて悲しくならない？」

「……若干」 二人は注文を終え、無駄話に興じていた。

因みに、レオはどれが美味しいのか分からずリアのオススメにする事にした。

「レオは傭兵なのよね？」

「ああ、一カ月前までテイリアで魔獣狩りの仕事をしてた」

魔獣とは魔法を使う高度な知性を持っている獣で、時々だが人や家畜が襲われる事がある。

魔獣狩りとは人や家畜を襲う事に常習性を持った魔獣を害獣と見なして駆除する事だ。

魔獣狩りの仕事は国の治安を守っている正規軍ではなく、使い勝手の良い傭兵に回って来る事が多い。

「へえ、その魔獣って何だったの？」

この質問に対して正直に答えようか迷ったレオだったが、嘘を付いても仕方無いと考えて本当の事を言う。

「サラマンダーだよ」

「サラマンダーを一人で倒したの!？」

驚いたリアが思わずテーブルに身を乗り出す。

サラマンダーは口から火の魔法を出す凶暴な大トカゲで、一人で倒すには並大抵の技量だと一切歯が立たない。

「そうだけど。リア行儀悪いぞ」

「うっ。……ごめをなさい」

しゅん、とまるで叱られた子犬のようにリアは肩を落とした。

「怒った訳じゃないから気にしなくていいよ」

可愛らしい姿を見てレオが微笑む。

「笑うなんてヒドいじゃない。レオ」

「ゴメンゴメン。リアの行動が……ね？」

思い出してまた笑い始めたレオを見たリアは頬を膨らまして自分が不機嫌だと表現した。

「……レオの意地悪う」

その台詞をレオはわざとスルーして話を変えた。

「ところで、リアはあんな所で何をやってたんだ？」

出会ってからずっと気になっていた事をレオは聞いた。しかし、

リアは何も答ええないまま視線を泳がせていた。

「えっと、ほら。アレアレ……………散歩？」

「なんで疑問形なんだ？」

「そんな事より私はレオの事聞きたいな!!」

リアは慌てて誤魔化す。

他人に言えない事ぐらいあるか、と割り切ってレオは話を戻した。

「まあ、そうやって色々な事をやって暮らしているよ」

「大変なのね」

「慣れれば苦じゃ無くなるよ」

苦笑いをしながらレオはそう話した。

「そつえばレオの髪って黒いけど出身はどこ？」

リアは珍しい大道芸を見るような眼で髪を見つめた。

何故、そのような疑問が出てきたかというと。この世界では髪が黒い人間は珍しく、大陸中でも一万は居ないからだ。

「名前を言っても分からないような小さな村だよ。その村には医者が居なかつたらしく難産だったって母さんが言ってたな」

レオが言い終わると同時に注文した料理が運ばれて来た。

## 第一話 剣の少年（後書き）

薬学部なので授業が忙しくてちよつとずつ掲載する事になりますが、これからもよろしくお願ひします。

## 第二話 救出（前書き）

速く大規模なバトル展開を書きたい今日この頃。  
とりあえず、ストック分を掲載します。

経験不足で駄文ですが、読んで頂けると幸いです。

## 第二話 救出

宿に着くとレオは部屋の中に人の気配を感じた。

一瞬ドアを蹴り破り、中の者を組み伏せようかと迷ったが、不法侵入者の素性に気が付き普通に扉を開けた。

「俺の部屋で何をしているんだ？」

ベッドに腰をかけている初老の男性にレオは気軽に声をかける。実際、レオとは十年來の付き合いがある。

「コレよコレ。お前さんもどうかの」

筋肉質だが年老いて皺のある手を口の前で上に動かす仕草を見せる。

「遠慮するよ。ロー爺さん」

ロー爺さんと呼ばれた彼は目を細めてレオを睨む。

「ワシの名はロードスなのだが」

「じゃあ、今度からはロージンって呼ぶぞ」

ロードスは諦めて溜め息を吐いた。

自分の荷物であるリュックをレオは椅子代わりに座り、歳の離れた旧友と向かい合う。

「で、本題は何かな？」

その一言で部屋の空気が張り詰めた。

「仕事の事で……ちよっとのう」

「やっぱり何かあるのか？」

レオはその言葉を予想していたように平然と返事をする。

何故レオが予想できていたかという点、今回の仕事が詳細不明な事と街の様子からだった。

「大規模に傭兵を集めているのに物騒な噂一つ聞かない。おかしいと考えるには条件が揃っている」

わざとらしくレオは説明口調で現在自分が解っている事を口にする。

「ワシ独自の調べだと雇われた傭兵の数は千近いらしいぞ」

「傭兵を千……。どこかと戦争でもするのか？」

「噂ではヘルガナール砦にも五百の傭兵が集まっているという話じゃよ」

ヘルガナール砦とは、かつて戦乱の時代に隣国のアルゼス王国が攻め込んだ時にその堅固な守りで相手を退けたというティルナノグ最強の砦だ。

レオに言わせれば、戦を知らないアルゼスを退けただけでよくティルナノグ最強と呼ぶなんて図々しいなという所だ。

「……戦争の噂無いようだし」

「やはり内乱かの？」

「その線が高いな」

憶測でしかないが、真実味はかなり濃いと二人は考えている。

レオとロードスは同時に今後の行動を決定した。

「いくら給金がよくても内乱わのう」

「俺は降りる。あんまりこういう事に関わると碌な事がおきない」

「お前さんが降りるのならワシも降りるしがないのう」

話がまとまり、ロードスは入り口から帰って行った。

独りになったレオはベッドにダイブして目を閉じた。

同時に心地の良い眠気がやってきてレオは意識を手放した。

「レ……」

遠くで俺を呼ぶ声が聞こえる。

レオは何も無い暗く寂しい所に立っていた。

「レ……きて」

声は暗闇に反響してどこから聞こえてくるのか解らない。

ココは冷たい。早く」

』の所に行きたい。



「……レオ」

遠くから綺麗な音で響いてきていた声が段々とはっきり聞こえてくる。

この声は……たしか。

「も〜レオ。起きて!!!」

ガツン。

音と一緒に地面に投げ飛ばされたような痛みが走る。

「ッ!!!」

痛みで悶絶するレオだったが、意地で声を出さない。

長年の傭兵生活により寝込みを襲われた場合の習慣で、レオは自分に攻撃を加えられなかった時には声をあげずにジツと息を殺すという事が身に付いている。

「やっと起きたのね。レオ」 反撃をする為に体勢を整えようとしたレオだったが、つい最近に出逢った少女の声に動きを止める。

「えっ、リア?」

居るはずのない人物の姿が眼に入ってくる。

「私以外の誰に見えるっていうの? レオは寝坊助さんね」

「いや、そういう意味じゃなくて何でココにいるのかって意味で言ってるのだけど」

その言葉に対してリアは拗ねたような顔をする。

レオはドギマギしながら昨日も同じような表情をしていた事を思い出した。

実際、客観的に見てリアは十人居たら十人が可愛いという程可愛らしい。そんな彼女が拗ねたような顔をするのは勿論破壊力抜群だ。

「私がレオの所に行っちゃいけないっていうの?」

「いや、そうじゃないけど……」

「ならいいのね。それじゃあ毎日来ましようかしら」

クスクスと笑いながら舞踏会で踊るようにクルッと回り、ベッドから離れる。

レオは溜め息を吐きながらベッドの横から起き上がる。

「朝食にしましょう」

その提案に頷いてレオはリュックから着替えを取り出す。

「リア、悪いけど下で待つてくれないか？」

「わかったわ。なるべく早く来てちょうだい」

部屋から出て行ったりリアを扉越しに見送り、レオはなるべく時間をかけずに着替えを済ます。

ちなみにレオが着ているのは通気性が良く動きやすいシャツと黒色の革のジャンパーのような物にジーンズのようなズボンだ。黒い革のジャンパーのような物はレオが昔ちよつとした理由でアルゼス軍と共に共闘した時に恩賞として貰った特別製だ。

あれから一年か、早いな。

レオが感慨深くアルゼス王国で起きた事を思い出していると外からリアの声が聞こえてきた。

「レオ、速く速く!!」

嬉しそうな明るい声に苦笑いしながらレオは宿の前を目指した。

廊下と階段、その二つを合わせただけの距離では時間的に五分もかからなかった筈だ。

しかし、宿の前に着くとリアがもう何時間も待たされたように不機嫌な表情をしていた。

「レオ、遅いわよ。私が待つてあげてるのだからもつと速く来なさい」

「そんなに時間は経ってないと思うんだけどな……」

「レオと一緒に時間は一秒でも惜しいもの。だから速くしないとダメなのよ」

そう言うつとリアはレオの手を引いて市場の方向に歩き始めた。

レオにはその足取りがスキップをしているように見えた。

「次はアツチに行きましょ!!」

朝から街の端から端までを見て回り、空はすっかり紅く染まっていた。

レオは歩き疲れた重い脚を半ば引きずりながらついて行く。

「ちよ、ちよっと待ってくれリア」

普段から怠惰に過ごしている訳ではないが、レオがいつも歩いている山道とは違い人混みを抜けるには力の入れ方が違うらしい。

「どうしたの、レオ？」

「そろそろ家に帰らないでいいのか？」

流石に女性より先に疲れたと音を上げるのはプライドが許さず、素朴な疑問を投げかけお茶を濁す。

すると、リアは不機嫌そうに頬を膨らませる。

「イヤよ。家に居ても作法がどうだとか、言葉遣いがどうのとか言われるのだもの」

「作法とか言葉遣いってやっぱリアの家って貴族なのか？」

昨日は隠すような素振りがあつたが、今は気にしている様子は無い。

天然で忘れていくという事があるかもしれない、とレオは考えてもいるが。

「まあ、そんな所よ。レオになら話しても問題無いし」

「信用されてるのかどうでもよく思われてるのか解らない台詞だな」  
「信用してるに決まっているじゃない」

クスリ、と笑いながらリアは躊躇する事もなく、堂々と言いつた。

言われてみれば、リアの言動は確かに粗雑かもしれないが、どこか気品があり優雅だった。

「それは良かった。仕事柄、信用される事が少ないから」

少し諦めたような顔をしてレオが愚痴をこぼす。

「仕事で人柄を見るのは愚の骨頂よ」

「そう言って貰えると嬉しいよ」

「ふふ、これくらいでいいのならいくらでも言っておあげるわよ」

リアの笑顔で心が和んでくるのを感じていたレオだったが、ここである事に気が付く。

同時に嫌な汗が頬を伝い落ちる。

「なあ、リア？」

落ち着くために一拍だけ置く。

「貴族の娘さんがどこの馬の骨かも分からない傭兵の男と会っていいの？」

普通だつたら打ち首も良いところだ。

リアもその事実に関付き、気まずそうな苦笑いを浮かべる。

「……お父様にバレたらマズいかも」

「デスヨネ」

ダラダラ流れ落ちる汗と痙攣を起こしたかのような足の震えに耐えるレオ。

「だ、大丈夫よ。レオの事誰にも言っていないし、家は脱け出して来たし」

すかさず、フォローをするリアだったが。

「それって確実に誰かと密会しようとしてるって言ってるようなものだよな？」

「……言われてみたら」

それがトドメだった。

諦めて二人はぎこちなく笑いあい。乾いた笑い声が夕闇に消えていった。

気を取り直して歩き出した二人だったが、別れの時間がすぐに訪れる。

「あ、教会の鐘」

ゴーンゴーン。

遠くもなく、近くもない場所から体に響く鐘の音が聞こえてくる。

教会の鐘は夕食の時間や子供がちゃんと家に帰るようにという理由で午後六時に鳴らされる。

「ごめんレオ。私帰らなきゃいけないの」  
それまで楽しそうだったリアが申し訳無さそうに頭を下げた。

「そう。ならお別れだね」

レオは寂しそうに笑う。

勿論、それにはきちんと理由がある。

「今日は家にお客様来ていて無理だけど明日また会いましょう」

リアの言葉を聞いてレオは決意する。

「……悪いけど無理だ。今日の夜この街を離れる」

「え？」

理解できないというような表情をしてリアは首を傾げる。

「だから明日には会えない」

相手が誰であろうとレオは深入りはしない。

それはレオが自分自身に誓った制約だ。

「……なんで？」

「今回の仕事には関わらないって決めたんだ」

少し震えるリアの声が壊れ掛けている心を抉る。

実際は仕事の事は関係無い。多少反乱に巻き込まれてもレオはものともしない実力がある。

しかし、反乱以上にリアの存在が彼にとってこの街に居られない原因になっている。

「でも、この街を離れる理由にはならないじゃない」

「今回の仕事はそれだけ面倒な事なんだ」

たった二日前に知り合った自分をこんなにも大切に思うリアは優しい娘だとレオは思った。

だから辛い。自分の勝手な制約で彼女を傷付けるのが、レオには剣で身を貫くように辛い。

「せつかく、仲良くなれたと思ったのに」

リアの瞳に涙が浮かぶ。

「レオも私を裏切るんだ」

その台詞をレオは黙って受け止める。

「レオのバカ!!!」

そう叫んでリアは走り出す。

その背中を見つめながらレオはせめて言いたかった言葉を口に  
する。

「リア。家でおかしな様子があったらすぐに逃げる」

貴族なら反乱で狙われるかもしれないと思ったレオの忠告だっ  
たが場違いにも程がある言葉だった。

「準備は終わったかの？」

「ああ、すぐに出れる」

リアと別れた後、ロードスが宿まで訪れ、レオは支度を整えた。  
「それにしても静かだな」

辺りは真つ暗になっており、時間も深夜と言って過言は無い。

街の中心部に灯りが見えるが、それは城を警護する兵士達の為  
にある灯りだ。

「……すまない」

ロードスに聞こえないようにレオは城の方向へ謝罪をする。

「この時間だと門からは出れないからのう。水路に向かうぞ」

「水路？」

「水路と言っても数ヶ月前の大雨で出来た自然の水路だかの」

ロードスによると大雨により川の水が溢れ、都市を守る城壁に  
人が一人通れる程の穴が出来たらしい。

「水が満ちていた時と違って今は単なる大穴になつとるからちよう  
ど良いじゃろう」

「そこまでどの位かかる？」

「ここからだ、そうさなあ十分程かかるじやろっ」

「そこまで兵士に見つからないようにしないとな」

夜中になると不埒な輩が活動を始める場合が多い。その為この時間は兵士達が巡回している事が多い。

無論、見つければ宿が牢屋になる事は確実だ。

十分後、ロードスが言った通りに到着する。

「それにしても今日は異様に静かだな」

普段なら二回か三回は兵士に出会す筈なのだが、レオ達は一度も姿すら見ていない。

「……何か嫌な予感がするな」

「奇遇じゃの。ワシもそうなのじゃよ」

普通だったら気にし過ぎだと思つところだが、長年傭兵をやつてきた二人にはそれが取り越し苦労には思えなかった。

「こういう時は逃げるのが一番じゃな。先に失礼するぞ」

そう言い残し、ロードスは水路に入っていく。

水路は小さく人が一人這って入れる位の大きさだったので、レオはロードスが無事に通り抜けるまでその場で待った。

「……！！」

「……！！」

ロードスが出口に到着する前にそう遠くない所から言い争いのような怒鳴り声が聞こえる。

「マズい、ロー爺さん」

急いで水路に入ろうとしたレオの視界にある人物が一瞬映り込んだ。

レオがこの街から無事に出て行くには早急に水路に入ればいい。しかし。

「あんな顔されたら……」

レオは背負っていた荷物をその場に置き、腰に下げている鞘から歪な刀……紫竜しりゅうを抜く。

歪と言つても形は刀を模している。違う所と言えば幅が広いのと峰にもう一つ刀を取り付けたような形をしている事だろう。

「先に行つてくれ」

「あい、わかつた」

そう一言言い残し、レオはある人物を助ける為に駆け出す。

レオが修得している剣術は少しだけ変わっており、その剣術の基礎を静止と動作の速さにしている。

つまり、静止した状態から一気に最大限の加速をするのがレオの剣術の基礎だ。

「俺も甘いな」

そう呟くとレオは水路から数十メートル先の門をスピードを落とさずに直角で曲がる。

曲がった先は一本の路地になっており、奥が行き止まりになっていた。

「へへ、追い詰めたぜ」

「追いかけてこは終わりか」

奥の行き止まりの壁に一人の女の子と三人の男が居た。

三人の男の内二人は傭兵らしく、統一性の無い格好をしている。「盛るな、傭兵風情が」

ただ一人だけ白の鎧で身を固めているリーダーと思われる騎士が二人の傭兵の前に出る。

あの格好はダルタニア騎士団。

ダルタニア騎士団とはこのティルナノグで最強と呼ばれる騎士団だ。

普段はダルタニア領に居る筈だけど。

元々、騎士団とは領地を持っている貴族が自分の領地と国を護る為にある。ダルタニア騎士団も通常ならダルタニア領で警備や訓練をしている筈だ。

因みにダルタニア領はガリレクスのある国王領の隣に位置する。「失礼しました。この者達は少々礼儀を理解できないらしくて」



騎士の男は恭しく頭を目の前の少女に下げる。

「……………」

しかし、少女は口を結び、相手を睨み付ける。

気丈に振る舞ってるのだろうが、少女のては恐怖から小刻みに震えていた。

「そろそろ城にお戻り下さい。リアーナ・サ・ティルナノーグ殿下」

その騎士の言葉にレオは目を見開いて驚いた。

何故なら追いかけていた少女はこの国の第二王女だったのだからだ。

「……………ふざけないでっ！！」

王女は敵意のこもった眼で騎士を睨む。

すると、騎士は肩をすくめ、隣に居た傭兵に行けと顎で命令する。

今だっ。

レオは一瞬で十メートルの道をゼロにする。

その動きは予備動作無しで静止の状態からトップスピードになる為、レオが瞬間移動したように周りの人間からは思えただろう。

「はっ！！」

騎士と傭兵の間をすり抜け、王女に手を出そうとしていた傭兵の腕を刀の峰で叩き折る。

同時に振った刀の勢いで体を反転させ、そのままスピードを付けて腕の折れた傭兵に回し蹴りをおみまいする。

「リア大丈夫か？」

突然の出来事にレオ以外の全員が呆然としてみると、レオはリアーナ……………リアに優しく声をかける。

「レ、オ？」

「それ以外に見えたなら医者を紹介しようか？」

驚いているリアにレオは軽口で答える。

「なん」

「ぎゃあああ、腕が腕が俺の腕が！！」

リアが何かを言う前に腕を折られた傭兵が叫びながらのた打ち回る。

それを見ていた騎士が鋭い眼でレオを睨む。

「貴様、何者だ？」

「そう聞かれて答える人間が居ると思うのか？」

「……減らず口を」

「褒め言葉として受け取っとくよ」

ギリ、と騎士は歯ぎしりをしながら剣を抜く。

騎士の剣はレオと違い、ティルナノグで伝統的な両刃の長剣だ。

「行け」

短く隣の傭兵に命令し、騎士は一步下がる。

「あなたには怨みは無いが、コレも仕事なんでね」

「こつちはボランティアだ。気にするな」

傭兵はレオの言葉が終わると、問答無用で上段に刃こぼれのした剣を振り上げる。

一連の動作からそれなりの手練れだと推測されるが、レオには動きが単調過ぎて欠伸が出そうになる。

「ぐふう」

剣が振り下ろされる瞬間にレオは脚の全ての筋力を使い傭兵の前に移動する。

それは余りに速過ぎて瞬間移動と言われても信じられる速さだった。

同時に左肘で水月……鳩尾みそめいをえぐる。

傭兵が倒れ、腹を押さえてうずくまる。

騎士は悔しそうにレオを睨み、剣を中段に構える。

「そんなナマクラで戦うのか？」

「貴様！！　ダルタニア騎士団長に与えられるこの剣をナマクラ

だと！！」

激怒した騎士は斜めに剣を振り上げ、飛び込んでくる。

今だ。

振り下ろす瞬間にレオは全て筋力を使い跳躍する。  
カチャン。

「えっ？ いつの間に？」

リアが驚いて思わず声をあげる。

納刀し、レオはリアに微笑みかける。

「リア、行こう」

「え！？ でも」

オロオロ、とリアはレオと騎士の間を交互に見比べる。

「大丈夫」

微笑みながらリアの手を握り、落ち着かせる。

だが、レオの予想とは反対にリアの顔が真っ赤に染まり、心臓が狂ったように拍動する。

「俺の勝ちだ」

台詞と同時に騎士が握っていた剣が中央から二つに折れる。

折れた、と表現するより斬れたと表現した方が正しい。

その事は武器を使用不可にするだけでなく、騎士の心も折り再起不能にした。

「……………すごい!？」

驚くリアを引っ張り、ロードスの待つ水路に向かった。

## 第二話 救出（後書き）

先日あったテストの前日に「明日のテストが終わったら二次元に旅立つんだ」と死亡フラグ建て、見事に爆死しました。

そんな馬鹿のような単なる馬鹿が書いてる小説ですが、これからも暇つぶしで読んで貰えると幸いです。

### 第三話 レオ（前書き）

自分の文才の無さに絶望した。  
出来る限り努力したので読んで頂けると幸いです。

### 第三話 レオ

「という事だ。ロー爺さん」

水路から王都の外へ出た三人は徒歩で南下しながらさつきまであった事をロードスに説明した。

「……ごめんなさい。私のせいでロードスさんにまで迷惑をかけてしまい」

もう訳なさそうにリアは俯く。

今三人が向かっているのは国王領から南に位置するグネルヴァ領という場所だ。

何故そこに向かっていているのかというと、戦力を立て直す為だ。

「昨日ダルタニア領の領主、ゲオリウス・ダルタニアが御父様に謁見を申して来たのよ」

「ん？ ダルタニアは国王と仲が悪いというのはなしだったはずじゃが？」

「そうだな。この国では有名な話だと思っただけど」

曰わく、国王は兵力のあるダルタニアが気に食わない。

曰わく、ダルタニアの兵力が多いのは反乱をするためだ。

などの噂話が二つの領地からは絶えない。

「二人の言つとおりよ。特に現領主のゲオリウスは好戦的で御父様とは仲が悪かったの」

「なら何故？」

「私には分からないわ。謁見は今日予定通りに行われて会食の時は普段通りだったのに……」

話していて日常が違うモノになってしまったのが哀しいのか、うつすらとリアのまぶたに涙が浮かぶ。

レオは何とも声をかけず、辺りの警戒に意識を向けた。

「レオの忠告が無かったら私も捕まってたわ」

そう言いレオに微笑むリア。

「辺りが騒がしくてこっさり様子を見に行ったら屋敷を囲むように騎士や傭兵が居て、レオの言葉を思い出してとっさに逃げて来たのよ」

「逃げ出せたのはよいが、途中で見つかりレオに助けられた。という事じゃな」

そう言い放つとロードスはガリレクスの方に向き直る。

「ロードスさん？」

リアが不思議そうな顔をする。

「ワシはガリレクスに戻って情報収集をする。レオ、後は頼めるかの？」

「大丈夫だ。リアは俺が護るよ」

レオは何気なく言った台詞だったが、リアには刺激が強かったらしい。見事なほど顔を真っ赤にした。

言った本人はまったく気づかないのはご愛嬌だ。

「あゝ、愛の告白ならよそでもらって良いかの？」

「あ、愛の告白なんて……でもレオなら」

呆れ顔で言うロードスの言葉にリアはオーバーヒートしそうになる。

「愛の告白？ 寝言は死んでから言ってもらえないかロー爺さん  
ため息を吐くレオ。

残念な事にリアの声は届かなかったらしい。

「それにたかが一介の傭兵が一国のお姫様に告白しても断られるのが関の山だろう？」

「……………鈍感」

「この手の話はレオにしても無駄じゃったな」

そう話に区切りを付けるとロードスは闇に紛れるように姿を消す。

「魔法！？」

魔法とはこの世界に多数ある学問の中の一つで正式には魔法学と呼ばれている。

起源は大昔に暴れまわり、人口を半分までにした魔獣達に対抗しようと研究されたのが始まりだ。

今では生活の一部にもなっているが、魔法の使い手が少ないのと魔法の恩恵を受けているのが分からないという理由で一般的には珍しいモノになっている。

「さっ、出来るだけ急いでグネルヴァ領に行こう」

「そうね。急がなくちゃ」

ガリレクスを出て約三時間歩き続け、レオ達は国王領とグネルヴァ領の境目にある森に辿り着いていた。

「少し休憩しよう」

そう言うとレオは近くにあつた木にもたれかかり、刀を木に立てかける。

リアもそれにならない、地面に座る。

「この森を抜ければグネルヴァ領だ。そこからグネルヴァ領主のいる街まで休憩無しで行くから充分に休もう」

「わかったわ。流石に私も疲れたもの……」

二人は月明かりだけに照らされた薄暗い森で休憩する。

何故、火を焚かないかという追っ手をに場所を知られないためだ。

「リア、眠れるなら少しでも仮眠をとった方がいい。見張りは俺がやっておくから」

ほとんど寝ていないだろうリアにレオは優しく提案をする。

しかし、リアは首を横に振る。

「歩き過ぎて眠気なんてどこかに行ってしまったわ。それより私はレオと話していたいのだけだ」

「わかった。でも無理はするなよ」



一度どこかで聞いた台詞だな、とレオは思いながら言葉を続ける。

「それでリアは何を聞きたいんだ？」

「そうね……」

わざとらしく悩む仕草をしたのも一瞬だけ、すぐにリアはニヤニヤと悪戯をしようとしている子供みないな表情になる。

「レオは恋人か好きな人は居るの？」

その質問にレオは呆れ顔になる。

「何でそんな話に……」

「女の子が夜に話し合うならこういう話になるのは当然よ。レオ」

言い返しても無駄だと悟ったレオは心の中でため息を吐く。

「恋人も好きな人も居ない」

「そうなの？ レオなら恋人の一人や二人居そうだけど」

「いや、二人も居ちゃダメだろう」

今日何度目かのため息を吐く。

「……そっか、居ないならチャンスね」

「ん？ 何か言ったか？」

「えっ、いや……何でもないわよ」

リアは慌てて否定する。

普通の人間ならこれまでの態度でリアがどのような感情をレオに抱いているかは明白だが、レオはそれに気づかない。

「じゃあ、今度は俺からリアに質問。一人でグネルヴァ領主のいる街まで行けるか？」

レオが急に真面目な声色で言う。

「いきなりどうしたのよレオ？」

「多分、騎士団だ。ざっと二十人ほど居る」

一般人には到底聞き取れないレベルの足音をレオは長年の努力により聞き取り、相手の戦力を分析する。

音から察するに、馬が二頭、弓兵が五人、重騎士が五人、普通の騎士が十人か。

それはまともに戦えばいくら腕に自信があるレオでも負ける可能性がある戦力だ。

だが、あくまでも『まともに』だ。

「リア、速く逃げろ」

作戦を頭の中で考えながらリアに指示をする。

相手の狙いはリアだ。そのリアを敵が大勢いるこの場に留めておく必要は無い。

しかし。

「いや、絶対レオと一緒にいるもの」

「は？」

予想外の拒否にあい、レオは思わず聞き返す。

「危ないからリアは逃げようよ」

「なんで私がレオと離れなければいけないの」

「流石に無傷で二十人も相手出来ないから逃げて欲しいな」

「レオなら大丈夫よ」

どこから出てくるのか分からない自信をもってリアは断言する。

レオは苦虫を噛み潰したような顔になる。

「それにレオの近くが一番安全だと思っただけれど？」

言葉と同時に可愛らしい笑みを浮かべるリア。

レオにはその笑顔が悪魔の微笑みに見えた。

「わかった。でも、絶対に危ない真似はするな」

「さっすが、レオ。話が分かるわね」

リアにバレないようにこっそり溜め息を吐くレオ。

同時に近くに立てかけておいた刀に手を伸ばす。

「容赦ないな」

そう呟くのと同時に鞘から刀を抜き出し居合いを一閃。

キンッ。

頭に響くかん高い金属音が静かな森にこだまする。

「流石は国最強の騎士団」

ニヤリと不敵に口を吊り上げる。

「すぐ戻る。動くなよリア」

「わかったわ。あなたに神の加護が有らんことを」

リアは神を信じている訳ではないが、ティルナノーグでは戦場に赴く時に騎士の無事を祈るのが常識だ。

「行ってくる」

その言葉と同時にレオはリアの視界から消えた。

「ハッ！！」

気合いと共に目の前に呆けていた騎士を横薙で首に一閃。

そのまま加速して近くに居た二人の騎士の腕を切り落とす。

「ぎああああ！！」

「うわあああ！！」

最初に斬った男は苦痛を言葉にする前に地面に倒れ動かなくなる。

およそ、何があったのか解らないまま人生が終わってしまったのだらう。

「まずは三人」

空中で刀を振るい、血を飛ばす。これを血振るいという。

「きゅ、弓兵撃てえ！！」

弓を持っていた五人はその声で慌てて矢を構える。

「遅い」

レオは隊の後ろにいる弓兵を片付ける為、右前方にある木に跳ぶ。

騎士達が眼で追えたのはそこまでだった。

「これで八人」

レオがそう宣言すると弓兵達はその場に倒れ込む。

「なっ……！！？」

この中では隊長だと思われる馬に乗った騎士が絶句する。

「騎士の誓いも誇りも忘れた愚かな騎士団よ。貴殿等がここで剣を収めて去るといふのなら追いはしない」

レオは森に響き渡るような大声で問う。

それは威圧的でありながら恐怖ではなく、威厳がありながら驕らない、しいて言うなら王族のような気高い言葉。

「だが、それでも騎士の盟に反して主に剣を向けるのならこのレオンハルトが相手する」

気圧されて騎士達の足が半歩だけ後ろに下がる。

「き、貴様等下がるな戦え!!」

「あくまでも戦うというのなら……。斬る!!」

重騎士と呼ばれる機動力を度外視にして防御力を徹底的に追求した重装備の騎士が五人同時に槍を持って突撃してくる。

重騎士は確かに堅い。だが、人間である以上関節部分は脆い。

レオは体勢を低くし、重騎士達の横を通り抜ける。

交錯する瞬間、レオは刀を振り相手の膝裏を斬りつけ動けなくする。

「セイツ!!」

掛け声をして気合いを入れ直し、近くの重騎士の肘を剣先で斬る。

「借りるぞ」

重騎士が痛みで手放した槍を空中で掴み、槍投げの要領で投げる。

「イガアア!!」

来ると思っていたいなかった騎士が突然の攻撃に反応出来る訳はなく肩に槍が刺さった。

「くっ!!」

レオは投げた動作からすぐに横に跳び避けようとしたが、いつの間にか近付いていた騎士に左腕を斬られた。

とつさにレオは蹴りを斬りつけた騎士の水月に叩き込み戦闘不能にさせる。

「畳み掛ける!!!」

レオがこの戦いで初めて血を流したのを見た騎士達は志気を高めて一気に押し寄せてくる。

怪我の様子を診たかったレオはバックステップで距離をとる。

その距離は僅か五メートル。

出血は派手だが、浅い。

追撃をかける為に重騎士三人が槍を突き出して走ってくる。

「ふう」

息を吐いて力を抜いたレオはわざと敵に背を向ける。

「次は誰が相手をしてくれるんだ？」

いつの間にか重騎士の後ろに居たレオが軽口を叩いた瞬間に三人の重騎士は血を流して倒れた。

その行動に要した時間、約一秒。

「ば、化け物」

もはや、人間の限界を超えた動きをみせるレオを表現するなら適切な言葉だった。

「残り四人か」

レオは次の獲物に狙いを定める。

右足に力を込め、跳躍する。

「ぎゃああ!!! 腕が腕があ」

隊長であろう馬に乗っていた騎士に一瞬で近づき、レオは相手の肩を切り落とした。

「に、逃げるあ!?!」

乗馬していたもう一人の騎士が慌てて逃げて行く。

「ま、待って下さい!!!」

残りの二人も一目散に逃げていき戦いは終わりを告げた。



### 第三話 レオ（後書き）

次こそはもっと速いペースで投稿したいと思います。

## 第四話 援軍（前書き）

……主人公最強と言ってる割にはレオがピンチです。

この後ももっとピンチになる予定なのですが……どうしよう？

今回もまたバトルです。

稚拙な文章かもしれませんが、最後まで読んで頂けると幸いです。

PS、新キャラ登場



## 第四話 援軍

レオとリアは森を走っていた。

「リア、大丈夫か？」

「平……気だ、から」

リアに合わして走っている為、レオはほとんど息切れをしてない。

しかし、駆けている速さは長距離を走るには少し速い。

「森を抜けるぞ」

前方の木々の間から草原と少数の民家が見える。

「リアは民家に駆け込め」

「レオはどうするのっ!？」

レオは森の終わりで立ち止まり、今まで走ってきた道を睥む。

「迎え撃つ」

何かを言いかけたリアだったが、その言葉を飲み込み眉をひそめた。

「……必ず迎えに来てよね」

「もちろん」

リアは悔しそうな表情をしながら民家に走り去っていく。それを確認したレオは刀に手を当て瞑想する。

百、いや百二十？

森に音が反響して聞き取り辛い、敵兵力に大体の予想を付ける。

兵力の差に絶望しかける。

「……護るモノさえなくなつた身」

レオは思い出す。

「だが、今一度護る事を出来るのなら」

無力で何も出来なかった過去を。

「今度こそ護ってみせる」

瞬間、レオの姿は消えて辺りには大量の馬の足音が響いていた。

「はあ……はあはあ、はあ」

リアは涙を浮かべて走っていた。

「レ、才死な……ないで」

彼女が泣いている理由は恐怖からくるものではなく。

何も出来ない。私が残っても足を引つ張るだけ。

役に立てない悔しさからだった。

「もう、少し」

森から民家まで半分に差し掛かった時にリアはある事に気が付く。

「あれは、馬？」

左側から大量の馬が走って来るのが見えた。

リアは慌てて走り出す。

「騎士団!？」

森から来る騎士団はレオが抑えているはずだ。

ここに騎士団が来るとするなら元から別働隊で動いていたのか、方向からして他の領地の騎士団だろう。

しかし、後者は考えにくい。

「ここはもう、グネルヴァ領……なのに」

他の領地の騎士団が勝手に入って来るなど有り得ない。

逆説的に森で騎士団が二手に別れて一方がリアを捕らえに来たに違いない。

「流石に……馬には勝てないかしら」

リアも頑張つて走っているが、馬の速さには勝てずにどんどん距離を詰められる。

「ぎゃあっ!?!」

長い時間走り続けて疲労が溜まっていたのだろう。  
地面あった小さな出っ張りを跨ぐ事が出来ずに躓いてしまう。

もう脚が動かない。

馬の足音が段々と大きくなる。

リアはレオのように音で戦力を分析出来る訳ではないが、今から逃げ切れる数ではないとわかった。

レオ、ごめんなさい。

今も独り戦っているであろう唯一の味方の姿を思い浮かべる。  
捕まる事を覚悟したリアだったが、彼が責任を感じてしまうのではないかと心配していた。

気が付くとすぐ近くまで馬が迫ってきていた。

最期にレオに会いたいな。

自分のピンチに颯爽と現れた人物の顔を思い描く。

ただ、リアは彼にもう会えない事に涙を流した。

「そのような場所に寝ておりますと体に悪いですよ。リアーナ様  
思っても無いことを、と思いながら起き上がるリア。」

しかし、相手の姿を見た瞬間、動きを止めた。

「あなたは!？」

レオはその頃、ひたすら刀を振り回していた。

「ハッ!!!」

気合いと共に馬の足を切り裂く。

「うああ、たす……助けて!!!」

落馬をして命乞いをする騎士の首を切り落とす。

同時に横に跳び、後ろから突撃してきた騎士を避ける。

「行かせるかっ!!!」

横を通り抜けようとした騎士に落ちていた剣を投げつける。

ザシュツ。

「…………ゴフツ」

「二十……二十一、二十二」

突っ込んでくる馬を木に飛び移る事で避け、同時に木を蹴って騎士に瞬時に近付き刀を振るう。

着地と共に横から近寄ってきていた騎馬の首に突き刺し、そのまま力を込めて騎士の胸に刀を突き立てる。

まずい、押し切られる！！

レオはほとんど無傷だが、確実にじりじりと森の出口に近付いている。

多勢に無勢、あまりにも戦力差があり過ぎた。

レオが一人倒している間に相手は三人出口に向かって走り出し、その三人を倒すと六人が出口に向かっていている。

「二十四人目！！」

木を利用して跳び蹴りをして馬から落とした騎士の首を空中ではねる。

しかし、その選択はミスだった。

「もらったあ！！」

「くっ！！」

空中で無理な体勢だった為、避けることが出来ずに槍を持った騎士がレオのわき腹を穿つ。

「…………ガ、アア」

「うぐう」

槍がわき腹を刺す一瞬手前で体を捻ってかわし、相手の首を刀先で切り裂いた。

槍を持っていた騎士は倒れ、レオはわき腹から血を流した。

「…………二十五」

自分の血で汚れている槍を手に取り、出口に向かって走っている騎士に投げつけた。

「二十六」

レオは焦っていた。

何故なら今自分がやられてないのは場所が森だからであり、馬がその機動力を存分に発揮出来る草原では流石のレオでもここまで保たないからだ。

「二十七、二十八」

続け様に二人の騎士の体を斬る。

出口まで五十メートル。

打って出るしかないか。

一秒だけ動きを止めたレオ。だが、瞬時に駆け出しトップスピードなる。

近くに居た騎士の脚と馬の横腹を斬る。

斬る瞬間だけ速度を落とすが、またすぐに最高速度となり移動する。

斬る、避ける、突き刺す、跳ぶ、蹴る、斬る、駆ける、跳ぶ、斬る、斬る、避ける、突き刺す。

「三十六」

先行してきた騎士全員を斬り捨てたレオは刀で体を支える事でもやっと体勢を維持する事が出来た。

無理もない、先の戦闘と併せて五十三人との殺し合いを繰り返したのだから。

「……来たか」

体中の筋肉が休ませると悲鳴をあげる。

歩くだけで筋肉が干切れるような痛みを発する。

しかし、レオは歯を食いしばり力を込める。

「……護ってみせる。絶対に」

「お願い助けて!!」

その人物を見た瞬間、リアはレオの救出を願った。  
その人物……ウィーナ・アリアスは優しく微笑む。

「大丈夫ですよ。我らティルナノグ国王騎士団はリアーナ様の味方です」

黒のポニーテールをしたウィーナはうやうやしく頭を下げ、リアに手を差し出す。

その手を握って立ち上がったリアは首を横に振る。

「レオを……今まで私を護ってくれたあの人を助けて!!」

リアは喉が張り裂けるような大声で懇願する。

「今も戦っているレオを助けて。ウィーナ」

懇願は嗚咽に変わり、リアの瞳には涙が溢れ出す。

ウィーナはその表情に困惑するが、それがリアの願いならばと領き騎士達に命令する。

「半数は私に付いて来い、もう半数はリアーナ様を御守りし皆までお連れしろ」

「ウィーナ、ありがとう」

「いえ、リアーナ様の願いは我らの願いですから。それでは行って参ります」

ハンカチをリアに渡してウィーナは白い角のある白馬に跨る。

「ティルナノグの騎士よ。反逆者共に正義の剣を突き立てよ」

「オオオオオオ!!」「」「」

「突撃っ!!」

地響きのような轟音と共にウィーナ達は森の方向へ走り出した。

「六十六、六十七、六十八」

レオは満身創痍で刀を振るっていた。

わき腹からは止まる事無く出血をし、顔には大量の斬り傷、左

腕は馬に蹴られて動かなく、両脚は酷使し過ぎて感覚が無くなってきた。

「押し切れえ!!! 相手は一人、休ませるな!!!」

出口まで十メートル。

文字通りギリギリの所でレオは耐えていた。

「六十九、七十」

馬の脚を斬り、騎士が落ちた所で刀を突き立てる。

ついでに殺した騎士から剣を奪い、違う騎士に投擲する。

出口まで五メートル。

敵は残り五十人。

「ガア、……七十一」

横から槍で殴られたレオだが、わざと吹き飛びダメージを減らす。

吹き飛んだ先の木を踏み台に跳躍して殴った相手の腕を斬り落とす。

結果的に相手を倒せたが、出口まであと木が三本だけになってしまった。

「今だ突撃!!!」

敵の全騎士が勢いよく突撃して来るのにレオは齒軋りをし、近くにあった数本の木の幹に刀を振るいすぐに後ろに跳ぶ。

「ギアアア!!!」

「ひいひい、ぐへ」

「避ける避ける!!!」

自身の重さに耐えきれなくなった木が数本倒れて数名の騎士達を押し潰した。

しかし、レオの反撃もここまでだった。

「囲め囲め囲め」

騎士達がレオの周りを半円状に囲む。

その数、約四十人。

「だいぶ手こずらされたな黒いの」

「お前達が弱いだけだ」

黒いの呼ばわりされたレオは吐き捨てるように答える。

「ふん、殺せ」

この隊のリーダーであろう騎士がつまらなさそうに命令する。  
命令と共に数人の槍を持っている騎士が前に出る。

「……ごめん、リア」

レオは頭に浮かんだ少女に向けて謝罪をする。

同時に騎士達は槍を引き突き刺す。

瞬間。

「……オオオオオオ!!」「……」

怒号と一緒に馬の駆け出す音が聞こえた。

「な、なんだ!?!」

「ひっ、アレは!!」

「国王騎士団!?!」

「逃げる!!」

悲鳴にも似た声をあげ、騎士達は半円状だった陣形を崩し始める。

「バカな、国王騎士団は演習に出てるはず」

相手のリーダーの顔に動揺が浮かぶ。

その瞬間をレオは見逃さなかった。

「ハッ!!」

最後の力を振り絞り、一瞬でリーダーの首を斬り裂いた。

「た、隊長!?!」

「撤退、撤退!!」

リーダーの死亡で騎士達は完璧に浮き足立ち烏合の衆と化した。  
それと時を同じくして角の生えた白馬に乗った騎士が膝をついているレオの前に現れた。

「ユニコーン?」

レオは初めて見たソレをユニコーンだと直感した。

しかし、レオは幻を見ているのかと感じていた。



何故ならユニコーンは他の馬より速く強靱だが、圧倒的に数が少なく、何より乙女の前にしか顕れないと言われているからだ。

「貴殿がリアーナ様の言っていたレオですね？」

ユニコーンに乗っていた人物が降りてレオの前に立つ。

その人物はレオと同じ漆黒の髪を後頭部で一つに結っていて、容姿は綺麗だが少しつり目で凜々しい印象を受ける少女だった。

「あ、ああ。そうだけど」

一瞬呆然と見とれてしまったレオだったが、慌てて返事をする。  
「随分とボロボロですね。立てますか？」

「大丈夫、一人でも立ち上げれる」

レオは差し出された手を握らず刀で体を支えて立ち上がる。

「私の名前はウィーナ・アリアスです」

「俺の名前はレオンハルト。リアからはレオって呼ばれている」

相手にならって自分の名前を言ったが、ウィーナは眉間に皺を寄せてレオを睨み付ける。

「……今なんと？」

「レオって呼ばれている」

聞き返されてレオはついさっき言った台詞をそのまま口に出す。  
しかし、ウィーナの意図した答えではなかったらしく眉間の皺が少し深くなる。

「もつと前です！！」

「俺の名前はレオンハルト」

「行き過ぎです。リアーナ様をなんとお呼びした！？」

「えっと、……リア？」

言った瞬間、ウィーナの額に青筋が出来るのをレオは見た。

「リアーナ様を呼び捨てにするとはいい覚悟ですね。……そこに正座！！」

「はいっ！！」

とつさにレオは冷たい地面に正座をする。

いや、レオには正座をする以外の選択肢がなかった。

「傭兵風情がリアーナ様を呼び捨てにするとは何事ですか!！」

「いや、それはリア本人が……」

「言い訳など聞いてません!! 大体ですな」

ウィーナのお説教はその後一時間にも渡って続けられた。

終わった頃には出血による目眩と正座による足の痺れで立ち上がる事が出来なくなったレオだった。

余談だが、リア達を追いかけていた騎士達はウィーナが率いた国王騎士団によって殲滅させられた。

## 第四話 援軍（後書き）

真面目キャラ、ウィーナ。

私的にはすごく気に入っているキャラです。

これから彼女も活躍すると思うのでよろしくお願いします。

第五話 シュク晝（前書き）

一休みという感じになってます。

レオのキャラが……

## 第五話 シュク砦

「これがシュク砦です」

ウィーナが用意した馬に乗って走っていたレオは視線を上げて砦を見渡す。

シュク砦の外見は岩で出来た壁で四方を囲んでいて四つ角には物見の高台があり、内部には石造りの塔と木造の兵舎があるのが見えた。

「警備もしっかり配置してあるな」

「ええ、唯一の出入り口の正門には常時八人の兵を。物見には一カ所につき交代制で常に一人以上は居ます」

「周辺の警備は？」

「二時間毎に十人を。一時間経つても戻らない場合は第一次戦闘隊形を組むようになってます」

警備の会話をしながら二人は砦の門をくぐる。

ちなみに門は馬が二頭並んで通るとほとんど隙間が無いほど小さかった。

「こちらです」

ユニコーンを降りてウィーナは早足で兵舎の方に歩いてく。

「ちょ、ちよっと待ってくれ」

急いで降りようとするレオだったが、体の節々が痛みを発してうまく降りれない。

それを見たウィーナはため息を吐きながらレオに近づく。

「大丈夫ですか？」

「ごめん、脚が上がらない」

「まったく、仕方ないですね」

ウィーナは馬の横で両腕を上上げて万歳のようなポーズをする。

「支えるのでこちらに倒れ込んで下さい」

「ありがとう」

「いえ、気にしないで下さい」

言葉に甘えてレオはウィーナの方に倒れ込む。

が、この行動は間違이었다。

「あ、れ？」

過度の出血をし、尚且つ体位を変えたことによる立ちくらみが起こった。

「え？ きゃっ!?!？」

手伝おうと上げた手とは違う所に倒れた為、レオはそのままウィーナと共に地面にダイブする。

「んぐ!!!」

倒れる瞬間に地面と激突する痛みを予想していたレオだったが、その痛みはなかなか訪れない。

代わりに柔らかく弾力のある何かが顔全体を包み込むような感触がした。

すなわち。

「な、ななな何をしていますか!?!？」

ウィーナの平均より大きい胸に顔面ダイブをしていた。

それに気がついたレオは慌てて上半身を起こす。

「うめ」

ん、という前に乾いた音が響き、レオが吹き飛ばす。

「……こんな事をするなんていい度胸ですね」

レオが退き、自由になったウィーナは幽鬼のように立ち上がる。

「わ、わざとじゃない!!」

「盛りのついた犬はちゃんと躡りませんとね」

レオは痛む体を無理矢理酷使して脱兎のごとく兵舎に逃げ込んだ。

「……ふう、どうやら悪人という訳ではなさそうですね」

ウィーナは先ほどとは違い安心した声を出した。

「まあ、リアーナ様を護って下さった人物が悪人のはずないのです

けれど」

レオはウィーナが怒っていたと思い逃げ出したが、実際彼女は全然怒ってなかった。

平手打ちは反射的にしてしまいました……。。

ウィーナはただレオがどういう人物か試したかっただけだ。

ただし、胸にダイブされたのは誤算だったが。

レオは百人もの兵士を相手に出来るほどの強者だ。そんな彼がもしも悪人ならばリアに恨まれようが、この場で首をはねるつもりだった。

「その必要は無いようですね」

助けてから今までの行動を見てそう結論付けたウィーナは嬉しそうに微笑む。

「……慌てた顔は意外に可愛かったですし」

レオの慌てた顔を思い出したのかウィーナは顔を真っ赤にし、照れたように笑った。

その頃レオはというと。

「思わず逃げたけど……ここはどこだ？」　あまりの怒気に我を忘れて一目散に逃げたレオだったが、初めて入る兵舎で場所も分からずさまよっていた。

しばらく歩くと質素な扉ばかり並んでいた壁に一つだけ立派な扉を発見した。

「ここで行き止まりか」

立派な扉の目の前で少し考え、ドアノブに手を伸ばす。

「失礼します」

中に居る気配を感じたレオは一応無礼の無いように声をかけてから開ける。

ノックをしない時点で失礼にあたるが、長年傭兵をやっているレオは気付かなかった。

「レオッ!」

「え?」

ドアを開いたのと同時にレオの視界いっぱい白い布が映り込む。

そして、人に体当たりされたような衝撃がレオを襲った。

「うわぁー!!」

「きゃっ!?!」

過度の疲労と出血で脚に力の入らないレオは廊下に押し倒される。

「うぐ、いた……」

「ご、ごめんなさい」

床に倒れたレオが痛みで悶えると押し倒された人物は慌てて彼の上から退く。

その人物に文句を言おうとレオは視線を上げる。

しかし、視線上げた瞬間に言葉が出て来なくなる。

「……リア」

言葉と同時に熱い何かレオの心を満たしていく。

「良かった、護れたんだ」

自然と口に出た言葉。

だが、レオはその台詞に嬉しさを感じた。

「良くなつて無いわ」

リアは俯いて言葉を紡ぐ。

「知っているんだからね、レオが百人の騎士と戦って死んじやいそつになつた事」

リアの頬に涙が流れる。

流れた涙は落ち、床ではねる。

「レオが死んじやつたら私は誰に護ってもらえばいいのっ!?!」

止まる事無く流れ出す雫をリアは気にせず叫ぶ。

「レオのバカ。レオのバカ。レオのバカ。レオ、の……ばか」

「ごめん」

「謝っても許さないんだから」

リアは拗ねたように頬を膨らましながら泣く。



レオは立ち上がり、彼女の頭に手を置く。  
「ありがとう」

言葉と共に優しく撫でる。

「もう絶対危ないことしないでよ」

照れたように微笑みながら涙を流すリア。

「断言は出来ないけれど約束する」

「確約出来ない約束なんてズルいわ」

「傭兵はざる賢くなくちゃ生きていけないんだよ」

リアはレオを抱きしめる。

「ちよつとだけこのままで居させて」

「わかった」

レオは頷き再び頭を撫でる。

心地良い感覚に二人は酔いそうになる。

「こほん、少しよろしいでしょうか」

「うわっ!？」

「きゃっ!！」

突然かかった声に二人は慌てて距離を離す。

「リアーナ様、心配だったのは解りますが殿方に抱きつくのはお止めになった方がよろしいかと」

開けっ放しにしていた扉の前にウィーナが呆れたような顔で立っていた。

「ウィーナ!！」

恥ずかしいのかリアは顔を紅く染めて抗議する。

「レオ先ほどは試すような真似をして申し訳ない」

「えっ、何が？」

視線をリアからレオに移して彼女は謝罪を口にする。

「先ほどの……アレです。事故ですしも怒っていないですから警戒をといて下さい」

ウィーナは思い出して頬を赤くする。

それを見たリアは訳が分からなかったが直感的にムツとした。

「でもアレは全面的に俺の方が悪いから。ごめん」

「気にしないでいいと私が言っているのですし、この話はここまでにしましょう」

このままだとイタチごっこだと悟ったウィーナが話を变える。

「ここはリアーナ様が使用するのでレオは隣の部屋を使って頂いて良いですか？」

「ああ、わかった」

「レオの部屋の向かい側に私の部屋があるので解らない事があつたら遠慮無くどうぞ」

「ありがとう」

レオはお礼を言って自分の部屋に向かった。

## 第五話 シュク晝（後書き）

次はまたバトルになるっぽいです。  
そして、とうとうリアの活躍があります

## 第六話 訓練（前書き）

前回リアが活躍するなど言っていた気がしますが、何の手違いか全く活躍しません。

リアの活躍は次回に持ち越しになります。

期待していた方々、誠にすみません。

そんな第六話ですが、最後まで読んで頂けると嬉しいです。

## 第六話 訓練

二日後。

「レオはもう大丈夫なの？」

「ああ、怪我をしていたといっても軽いモノばかりだったし、動けなかったのはほとんど過労だったし」

リアはレオの部屋に来て椅子に腰をかけていた。

「後で体を動かさないとな」

そう呟いた瞬間、扉がノックされてウィーナが入ってくる。

これから訓練に行くのかウィーナの手には二メートルほどの長さがある槍が握られている。

「レオ、体の調子はどうですか？」

「もう大丈夫だよ」

心配そうに見つめてくるウィーナにレオは出来るだけ明るい声で答える。

それに安心したウィーナだったが、すぐに真面目な顔になる。

「では手合わせをお願いしたいのですが」

この頼みには理由がある。

それは女性にもかかわらず国王騎士団の団長を務めているウィーナに少しでも太刀打ち出来る人物が居ないからだ。

「わかった。少し待っててくれ」

レオは綺麗に洗濯し、破れていた所を修繕した黒のジャンパーを羽織り立ち上がる。

「私も一緒に行くわ」

「わかりました。リアーナ様こちらに」

二人が並んで歩いているのを後ろから見たレオは姉妹のようだと感じながらついて行った。

そして、三人は兵舎の前にある小さめの訓練所に辿り着く。

「ウィーナ、レオ。二人とも頑張るよ」

リアは二人に激励の言葉をかけ、少し離れた木陰に座った。リアが離れるのを待ってウィーナは槍を構える。

「それではレオ、いきますよ」

「いつでも」

レオは紫竜の柄を掴み、左足を半歩だけ後ろに下げる。

「……ハッ！！」

正確に心臓を狙うウィーナの槍。

それをレオは冷静に体を横向にする事で避ける。

「流石ですねレオ」

言葉と共に素早く槍を引き、再び狙いを付けて突き刺す。

「ウィーナもなかなか」

レオは後ろに跳んで攻撃をやり過ごす。

「次は俺からいく」

ウィーナはとうとう来るかと体を緊張させる。

レオが動き出した瞬間にカウンターをくらわせようと腰を低くして構える。

しかし。

「っ！？」

ゾワッ、という氷水に全身をつけたような感覚に捕らわれ、急いでその場から飛び退く。

次の瞬間、ウィーナの居た場所には紫竜の刃が一閃されていた。

「……今のは結構本気だったんだけど。自信無くすなあ」

「いえ、普通の騎士では避けようがありません」

「避けたウィーナに言われても嫌味にしか聞こえないんだけどっ！」

言いながら一瞬でウィーナの目の前に移動したレオは紫竜を振るう。

キンッ。

ウィーナはその一振りを槍で防ぎ、同時に紫竜に当たっている部分を中心に槍を回す。

「ちっ!!」

舌打ちをしてレオは横に跳んで避ける。

「セヤツ!!」

レオは着地した反動で曲がった膝に力を込めて伸ばし、ウィーナに突っ込んで突きを放つ。

その行動に対してウィーナは槍の一番下を持って横薙に振るって攻撃する事で防ぐ。

槍に邪魔をされたレオはすぐに腕を戻して紫竜でガードする。

「……………すごい」

その一連の斬り合いを見ていたリアは感嘆のあまり息を呑む。

もはや眼で追うことがほとんど出来ないリアだったが、二人のレベルが一般的な騎士とはかけ離れていると感じていた。

「はぁ、はぁはぁ。そのスピードは何なんですか？」

肩で息をしながらウィーナは不思議なモノを観る眼でレオを見つめる。

「純粋な脚力と懸命な努力の賜物？」

「何故、疑問形なんですか……………」

呆れたような表情をするウィーナ。

「もういいです。私は本気を出させてもらいます」

「それじゃあ俺が本気になっていないみたいじゃないか？」

「違いますか？」

その質問にレオは苦笑いをする事で答える。

「いきます」

ウィーナはレオを睨みながら咳払いをして口を開く。

「精霊よ、世界を自由に駆け巡る風の精霊よ」

詩のようなウィーナの台詞。

それを聞いたレオは驚いたように目を見開く。

「我が声を聞き、我が願いを叶えたまえ」

祝詞。

それは本来、魔法使いが高度な魔法を使用する時にだけ使う呪

文。

「私に世界を駆ける力を！！」

祝詞の終わりと共に風がウィーナを中心に吹き荒れる。

それを見ていたレオは幽霊にでも遭ったような顔をする。

「ティルヴィング流剣術」

世界に存在するとされる精霊の力を借り、精霊と同等の力を得ようと生まれた今は無きティルヴィング王国の剣術。

「そうです。よく知っていますね」

「大陸最強と言われていた剣術位は知ってるよ」

曰わく、ティルヴィングの兵は一人で十の兵を容易く葬る。

「でも何でウィーナがそれを？」

レオがそう疑問に思うのは当然だった。

何故なら、ティルヴィング流剣術は国の民以外には伝えられていないはずだからだ。

国王騎士団の団長であるウィーナがティルヴィングの出身のはずは無い。

「祖父が昔ティルヴィングの剣士を助けた時、お礼にと幼かった父が教えて頂いたモノです」

「なるほど。義を重んじるティルヴィングの民らしいな」

納得したレオは紫竜を構え直し、瞳を閉じて瞑想する。

「では、いきます」

ウィーナの凜とした声が響くとレオは瞳を開いた。

同時にウィーナの体が淡く緑色に光り輝いたのを視認したレオだったが、光がブレたと感じた瞬間に姿を見失う。

「速いつー！！」

気がついた時にはレオの眼前に槍が迫ってきていた。

しかし、レオも瞬時に横へ移動して回避する。

「本気でないと怪我をしますよ」

お互いにバックステップで距離をとり、構え直す。

「……そうだな」



レオは息を吐いて集中する。

「ハアア!!!」

気合いと共に縦に斬りかかるが、ウィーナは難なく槍を横にして防ぐ。

防がれたレオはあえて後ろに下がらず距離を狭める。

「くっ!!!」

レオは縦や横、斜めや下から連続で斬りつける。

だが、その連撃をウィーナは器用に槍を動かして自身を守る。

何十回ものレオが放った斬撃を全て防御したウィーナは一瞬の隙をつき、後ろに下がると同時に槍で穿つ。

「私の槍を全て防ぎきれますが、レオ？」

「ちっ、……まだまだ」

右太腿、左腕、首、心臓、右肩、左のわき腹、鳩尾、眉間、下腹、それら全ての場所にほぼ同時で槍が迫ってくる。

レオは十分の一秒ほどの誤差を的確に見極めて全部の攻撃を時には逸らし、時には叩き、時には紫竜で防いだ。

およそ百近い攻撃と防御で斬り結び、二人は一時離れる。

「流石ウィーナ、速いな」

「いえ、レオの一撃の重さも流石です」

二人は楽しげに口の端をつり上げて笑う。

レオは腕を上にあげて紫竜を上段に構え、ウィーナは姿勢を低く下段から心臓を突き刺せる構えをする。

「私の速さに勝てますか？」

「さあね。でもウィーナは俺の力に勝てるのか？」

「やってみないとわかりません」

「同感だ」

先に動いたのはウィーナだった。

ウィーナは渾身の力で地を蹴って凄まじい速度で突撃して来る。それを見たレオもほぼ同時に動き出す。

「ハアッ!!!」

刀の刃渡りでは決して届く事のない距離でレオは紫竜を振り下ろす。

同時にレオは紫竜の柄を手離す。

「ッ！！」

予想外の行動にウィーナは立ち止まり、槍で紫竜を叩き落とす。

ドコッ。

「……………ぐふっ」

ウィーナの足が止まった瞬間にレオは左手で槍を抑えて右肘で相手の鳩尾を抉った。

人体の急所にダメージをくらったウィーナは手の力が抜けて槍を落とした。

「……………やはりレオは強いですね」

普通の人間なら意識を失ってもおかしくない威力の攻撃だったが、精霊の力で強化されているウィーナは手足に力が入らない程度で済んでいた。

しかし、体を支える事は出来ないらしくレオは抱き締めるようにウィーナを支えた。

「大丈夫か？」

「少し安静にしていれば治りますが、この格好は……………その、少々恥ずかしいですね」

視線を下げると頬を真っ赤にしているウィーナが恥ずかしそうに眼を伏せているのが見えた。

その可愛らしい姿にレオはちょっとした悪戯心が芽生えた。

「ちよつと、ごめん」

「えっ！？ レオっ何するんですか！！」

彼女が動けないのを利用し、右腕を膝に、左腕を肩に回してウィーナを抱き上げる。

いわゆる、お姫様抱っこだ。

「怪我人は黙って言う事を聞く」

「うう、でも」

「言つ事を聞かないともつと恥ずかしくなる事するよ」

レオの台詞に顔を紅くしたウィーナはコクリと黙って頷く。

それは恥ずかし過ぎて言葉が出なかつたウィーナの精一杯の行動だつた。

「……重くはないですか？」

「重い」

「そこは重くないと言つべきです」

ウィーナはジト目で恨めしそうにレオを睨む。

「一人が乗つてれば誰が乗つても重い」

「それでも女性はあえて重くないよと言われるのが嬉しいんです」

「そういうモノか？」

「そういうモノです」

どこが面白いか分からないが二人は一斉に笑い出す。

ほがらかな雰囲気でリアの居る木陰に向かう。

そこで般若が待っているとも知らずに。

「二人とも凄くいい雰囲気ね」

無表情で無感情にリアは二人を迎える。

「リアーナ様！！」

「リ、リア？」

ウィーナは驚き、レオは戸惑つたような顔をする。

「お姫様抱っこねえ」

まず、リアはウィーナに狙いを付けたらしい。

「良かったわね、ウィーナ。嬉しそうに頬が緩んでるわよ」

「なっ、ち違います！！」

何が違うのか分からないが思い当たる事があるウィーナは目に見えて動揺する。

「殿方に初めて抱き上げられて恥ずかしいですし、それがレオなので嬉しさの方が多いですが、ドキドキもしていてレオの顔が近いですけれどにやけてなんていません！！」

パニックに陥つたウィーナは意味不明な文法で話し始めた。

「この前もレオのテレた顔が可愛らしくて抱き締めたくなったのですが我慢しましたし、そんな嬉しくない訳ではありませんでして」「十九にもなつて可愛らしいって……」

「……からかい過ぎたかしら」

リアとレオはどうしようと考えながら顔を見合わせる。

和やかな空気が流れているその時。

カンカンカンカン。

「何だ、この音は？」

突然の鐘を叩く音にレオは訝しむように、リアは訳の解らなさそうな表情をする。

「レオ、これは敵襲の鐘です」

いつの間にか復活したウィーナが二人の疑問に答える。

「敵襲!？」

「はい、相手の規模は分かりませんがリアーナ様を狙っているのは確実です」

ウィーナは悔しそうに歯ぎしりをする。

「この砦にはどの位兵がいる？」

「元々新兵の訓練の為に小さいな砦を使っていますからまともに戦えるのは百以下ですね」

ウィーナから聞かされた事実レオは絶句する。

そして、怒ったように声を荒げる。

「リアが狙われているのは分かっていたはずだ。なら何故、違う砦へ移動しない!!」

レオの疑問は尤もだ。

これでは腹を空かせた猛獣を檻に入れず、野放しにするのと同じだ。

「ここはグネルヴァ領の東に位置していて今はダルタニアに対する重大な防衛拠点です。私はここを留守にする事は出来ません」

ここまでウィーナの話聞いてレオは理解した。

要約すると、戦力にならない新兵なら動かす事は出来るが護衛

にはならず、護衛の出来る騎士達は防衛に駆り出され動く事が出来ない。

「大声を出してすまない」

「いえ、こうなるのなら無理にでも移動するべきでした」

「ウィーナのせいじゃないわ。……私のせいよ」

リアは泣きそうな表情をして歯を食いしばる。

「悔やんでいても仕方ない。今はこの砦の防衛を考えよう」

「そうですね。そろそろ物見からの報せが来ると思いますし」

そう言うのと同時に一人の兵士が走り込んでくる。

「で、伝令です。敵軍勢までの距離は約二キロ、一時間以内にこの砦に到達する予想です!!」

「敵の数は？」

「一番気になっていた事を問う。」

「敵兵数は約千。こちらの十倍の兵力です」

## 第六話 訓練（後書き）

ご意見、ご感想があればどしどしどうぞ。

あまりきついことを言われると心が砕けますが、頑張って改善していく所存です。

次話は四日後に投稿します。

## 第七話 防衛戦（前書き）

今回は急いで書き上げた為に誤字脱字が多くあるかもしれませんが、気がついた方は教えて頂ける幸いです。

## 第七話 防衛戦

リアとレオ、ウィーナを含めた十人が砦の一室に集まっていた。敵兵数は約千。このシユク砦でどう立ち向かうか……」

三十歳位の騎士が眉間に皺を寄せて難しい顔をする。

それを真似たように部屋にいる騎士全員が同じ表情をする。

「いっそ砦を捨てて逃げるといふのは？」

「砦の先には民家もある。騎士として彼らを見捨てる事は有り得ぬ」  
「うむ。それはそうだが、リアーナ様の安全には仕方あるまい？」

今、この場に居る騎士達の見解は逃げるのと迎え撃つの二つに別れていた。

レオはウィーナが何も言わないので黙って壁に背を預けて隅に立っていた。

「このまま話し合いをしては時間が無くなる。多数決で決めるのはいかがか？」

一番歳のとつた騎士が決定方法を提案し、他の騎士達は頷いた。

「まずは迎え撃つ方が良いという者？」

仕切っていた騎士と他の騎士二人が手を挙げる。

「私の代わりに民が傷つくのは有り得ないわ」

その言葉と共にリアは手を挙げる。

リアの行動に騎士達は目を見開き驚く。

ただ一人、ウィーナはその行動に優しく微笑みながら手を挙げる。

「リアーナ様ならそうおっしゃると思ってました」

これで票数は五。

レオは溜め息を吐き、拳手をする。

「俺が意見していいのか分からないが、迎え撃つに一票」

「では、敵兵を迎え撃つ事に決定します。兵達には第一次戦闘隊形を」



ウィーナの命令に一人にの騎士が立ち上がり、走って出て行く。「……問題はどうか迎え撃つか」

その難題に室内は沈黙に捕らわれた。

兵力が十倍。いくら砦での防衛戦だからといっても兵力が違い過ぎる。

「近づく前に矢で殺し尽くすなどは？」

「現実的ではないな」

「ここは意表をついて攻勢に出るはどうだ？」

「うむ、迎撃と撤退を繰り返して兵を削るのが現状最良かもしれない」

「しかし、敵兵に囲まれ孤立すれば兵力が激減するな」

再び思考の袋小路に入り黙り込んだ。

だが、そんな状態で一人だけ声を出す人物が居た。

「私に考えがあるわ」

リアは腕組みをして悩むように周りを見渡す。

「レオ。森で相手にした敵兵は何人？」

「確か百人位だったと思う」

リアはそれを聞いて蠱惑的な笑みを浮かべる。

その表情に嫌な予感を感じたレオは釘を刺す。

「流石に千の兵の相手は出来ないぞ」

「そんな事させないわ。ウィーナ、レオと同じ事出来る？」

次にウィーナの方に向き、リアは真面目な顔で質問する。

ウィーナは少し思考を巡らせてから口を開く。

「試してみないとわかりませんが、五十人ほどなら大丈夫だと思います」

「充分よ」

リアは砦の地図を取り出して机の上に広げる。

「私が考えた作戦はまず二人以外の兵士は全て弓兵として動いてもらうわ」

リアがそう口にするると一人の騎士が手を挙げて疑問を声に出す。

「砦の守りはとうするんでしょうか？」

その疑問は尤もだ。全て兵士を弓兵すればじかに敵と相対する兵士がいなくなり防衛が出来なくなる。

リアはその言葉に頷きながら答える。

「砦の守りはレオとウィーナの二人にやってもらおうわ」

「なっ!？」

「いくらなんでもたった二人で千の兵を相手にする事は無理ですっ!!!」

騎士達は怪訝な表情でリアを見つめる。

その視線をモノともせずリアは悪戯をするような顔をして地図上の一ヶ所を指差す。

「ここに二人を配置するわ」

その作戦に室内は静まり返った。

その中で一番最初に口を開いたのは意外にも話し合いに口を出さなかったレオだった。

「勝算と理由は？」

「まず理由は二人が他の騎士に比べて桁違いに強いから。次に勝算は決して勝たなくてもいい防衛戦だからよ」

レオとリアはお互いに見つめ合い視線を外さず真剣な表情をする。

「ウィーナ、グネルヴァ領主に援軍の要請を」

「既に連絡はしてあります。今朝早馬で後一日でこちらに到着するようです」

ウィーナと話が終わったリアはレオに最終確認をする。

「レオ、出来る？」

「一日中戦い通しか」

ニヤリと口元を歪めながらレオは答えを言う。

「それしか方法が無いのなら仕方ない」

その台詞を聞いてリアは次にウィーナの方へ向き直り見つめる。リアが口を開く前にウィーナが言葉をかける。

「リアーナ様のご命令とあらば」

リアは嬉しそうでもあり、悲しそうでもある不思議な表情をして頷いた。

「それでは全て兵士は各々の配置に着け」

ウィーナの命令と共に騎士達は部屋から退室をし、三人だけ残った。

「レオ、ウィーナ。ごめんなさい」

パタンとドアが閉まったのと同時にリアは頭を深く下げて二人に謝った。

理由は言わずもがな、今回の作戦は二人に死ねと言っているのと同じ意味だったからだ。

「頭を上げてくださいリアーナ様」

ウィーナは諭すように柔らかな声で語りかける。

「この作戦でリアーナ様を確実に護れるのなら私は死をいといません」

「……ウィーナ」

リアは泣きそうになりながらも必死に我慢してウィーナに抱き付いた。

「ありがとう。でも、絶対に死なないで」

「はい」

返事を聞くとリアはウィーナから離れてレオを見つめる。

「レオも絶対に死なないで」

「……わかった。死なないでリアを護るとこの刀に誓おう」

レオの答えを聞いたリアは一步下がりが、まぶたを閉じて手を胸に当てて祈る。

「神の加護が有らんことを」

その祈りを聞いた二人はリアの考えた作戦通りある場所向かった。

砦を囲んだ傭兵と騎士の軍団から開戦を告げる角笛が鳴り響く。

「準備はいいですか、レオ？」

「ああ、大丈夫だ」

ウィーナは槍を構え、レオは紫竜の柄を握る。

二人の目つきが鋭い物に変わる。

「開けえ!!!」

騎士の声と共に二人の視界に千の敵兵の姿が映り込んだ。

「矢を放てっ!!!」

ウィーナの命令で百の矢がレオ達に突撃して来た敵の兵士達に放たれる。

「『ギアアア!!!』」

半数の矢が命中し、半数の矢が地面に突き刺さる。

矢で殺し損なった大量の兵が二人に襲いかかって来た。

何故、二人だけが狙われているかというと。

「門が開いているのなら普通はそこから入ろうとしますよね」

「だけど、あんな大人数じゃこの砦の狭い門は入れない。相手は自主的に四人ずつ入る事になる」

「四人程度なら私達の敵ではないですからね」

流石はリアーナ様、と言ったウィーナは敵が五十メートル先に居るのを確認して祝詞を唱える。

「来るぞ」

「わかってます。レオ、あなたの背中が護ります」

「じゃあ、ウィーナの背中が俺が護るよ」

戦前の緊張をほぐす軽口を言い合って二人は眼前まで迫ってきている敵兵に突撃する。

ウィーナは最初に門へ侵入して来た三人の心臓を続けざまに突き刺し殺して。

レオは槍を引き戻す前のウィーナに斬りかかった一人の首を居

合いで断ち切った。

「ウィーナ!!」

「わかってます」

一瞬の戦闘だったが、その隙に傭兵が一人レオ達の横を通り過ぎて砦内に侵入しようとしていた。

それに気づいたレオが声を出すのと同時にウィーナは駆け出して後ろから首に槍を突き立てる。

「……カフツ」

傭兵が死んだのを横目で確認したレオは目の前に居た敵兵の脚を切り裂き、横を通り抜けようとした敵には一回転して刀で肩を切り落とす。

見事な連撃だったが、回転するのはどうしても行動を制限してしまう。

それは相手にとって絶好のチャンスだった。

「し、死ねえ!!」

斜め前から迫ってくる切っ先にレオは反応出来ない……いや、反応しない。

「レオ、油断大敵ですよ」

「がああ、ああ」

レオの顔の真横から伸びた槍が相手の眉間を正確に捉えて風穴を空けていた。

「すまない」

礼を言いながらレオは槍が刺さったままの相手を蹴って数メートル飛ばす。

「ひっ、ば化け物」

「撤退、こんな奴らに勝てるかつ!!」

今までの戦いを見て戦意喪失した敵兵士達が慌てて門から退却していく。

しかし、国王騎士団はその隙を見逃さない。

「今だ、放て!!」

どこからともなく騎士の声が響き、門の外に無数の矢が降り注いだ。

敵の悲鳴が門の中に反響して二人は顔をしかめる。

「……第一陣はこれで終わりのようですね」

「すぐに次が来る。気を抜くな」

レオの言葉と共にそれまで動きのなかった敵兵士達が盾を持ち動き始めた。

「矢を防ぎつつ、盾で俺達を押し切る作戦か？」

「そのようですね。私が正面から行きます、なので」

「俺は裏から叩く」

ウィーナの台詞に被せてレオは先回りした言葉を言う。

その言葉にウィーナは頷きながら微笑む。

「では、いきましよう」

「ああ」

ウィーナは地面を蹴って敵に突撃し、レオは高く飛び上がり天井を蹴って相手の隊列の後方に着地した。

今度の敵の数は約五十。

これからまだ増えていくだろうが、二人は臆する事無く敵を切り裂き、突き刺し、肉片の山を築き上げていく。

## 第七話 防衛戦（後書き）

四日ペースにしようと思った矢先に投稿が遅くなるという大失敗……  
誠にすいません

だがしかし、年末とお盆は忙しいから仕方ないですよね？  
分かってくれる人が居る事を祈ってます。

## 第八話 叫び（前書き）

遅くなって誠にすみません。  
休日の暇つぶしにでも読んで頂けると幸いです。



## 第八話 叫び

開戦から幾刻の時間が過ぎたか、辺りは暗くなり砦の外も嵐の前のように静かになっている。

レオは壁に背を預けて座り込んだ。

「今何時だ？」

「二十三時を回った所だと思います」

ウィーナは腰に付けているポーチから干し肉と乾パンを取り出してレオに渡す。

それをレオは受け取って口に運んだ瞬間。

「レオ、ウィーナ。スープ持ってきたわよ」

「リア！？」

「リアーナ様！？」

いきなり現れたリアに驚いて二人は声を荒げた。

その声に驚き、リアは体をビクツと震えさせる。

「二人共驚き過ぎよ。びっくりしたじゃない」

リアはスープを渡して二人のそばに腰かける。

「ありがとう」

「ありがとうございます」

二人は礼を言つてスープを喉に流し込んだ。

辺りに死体が転がっている状況で食事ができるのは流石としか言いようがない。

「……………」

「リアが悪い訳じゃない」

リアが無言で死体の山に目を向けて悲しい表情をしているのを見てレオは優しく声をかける。

「そうです。リアーナ様が悲嘆する事ではありません」

続けてウィーナが諭すとリアはポロポロと涙を流し始めた。

「この人達だつてこの国の国民だわ」

泣きながらも気丈に凜として言う。

「王族として彼らを守る使命が私にはあるのよ」

「……リアーナ様」

「なのに助ける事も出来ず、ただ隠れているだけの自分が悔しい……」

レオは何も言わずに天井を見上げる。

「それに二人にはかり嫌な事を押し付けている自分が情けないっ！  
！」

悲しみは自分に対する怒りに変わり、リアは大きな声で叫ぶ。

「私に全てを守る力があれば、誰も傷付かないでいい幸せな国を作る力があつたのならっ！！」

「作ろう」

聞き手に回っていたレオが唐突に言葉を挟む。

「誰も傷付かないでいい幸せな国を」

まるで自分の願いのようにレオは真摯な声で誓う。

「そうですね。リアーナ様、作りましょう幸せな国を」

「レオ、ウィーナ……」

呆然としているリアにレオは跪く。

「世界がそれを拒んでもリアーナ・サ・ティルナノグが望むのなら俺は世界とも戦う」

レオが誓った後にウィーナも跪き誓う。

「我が槍はリアーナ様の願いと共に全て守る力となります」

一人一人が世界を変える事は出来ない。しかし、一人が二人、三人と変えようと願い働きかける事で世界は変わるかもしれない。

「……ありがとう。二人がそう言ってくれるのなら私も戦うわ」

さつきまで泣いていたのが嘘のようにリアは堂々と宣言する。

「攻勢に出るわよ」

その言葉にウィーナとレオは度肝を抜かれた。

というか、ウィーナは自分が聞き間違いをしたのかと疑っていた。

そんな二人を見て満足そうにしたリアは説明をする。

「今から夜明けまで門を閉じて二人共中でも休んでもらうわよ」

「門の守護は？」

疑問に思った事をレオは口に出した。

「相手には破城槌も無かったから夜明けまでは保つはずよ」

「なるほど」

レオが納得して頷くと次にウィーナが質問をする。

「なぜ、このまま防衛戦に撤しないのですか？」

ウィーナの言っている事は尤もだ。

防衛戦であるならば勝つ事はできなくても負ける事はないからだ。

「相手もそう考えているからよ。その隙をつく事が出来れば被害を少なく相手に大打撃を与えられるわ」

「そうする事が出来れば敵も撤退するという事ですか？」

「そうよ」

リアの言う事は可能性としてあるだけで今一つ決定打が無い。

「もしも、敵が撤退しない場合は？」

その言葉にリアは待つてましたと言うようにニヤケる。

「大丈夫よ。夜明けなんだから」

「そうだな。夜明けだからな」

リアの言っている事を理解したレオは同じように唇を吊り上げた。

「えっ？ どういう事ですか？」

一人分からなかったウィーナがオロオロとリアとレオの顔を見比べていた。

「今日から見ると夜明けは明日なのよウィーナ」

「あっ、なるほど。わかりました」

やっと理解したウィーナは頷くが、すぐに険しい表情になる。

「しかし、すぐに来るとは限らないのではありませんか？」

「だからこそ隙をつく明け方なんだろ？」

「そうね。いざという時はすぐに砦に戻るか、グネルヴァ領に逃げればいいわ」

納得したウィーナは早速砦に戻り、命令を出しに行った。それを横目で見ながらレオはリアに最後の疑問を聞く。

「リア、なんで今頃こんな作戦を？」

レオの質問にリアは複雑な顔をする。

「私が弱いから。自分に味方してくれるみんなに傷付いてほしくないのよ」

すぐるようにリアはレオの胸に抱き付く。

「この作戦はうまくいっても誰かが怪我をするわ」

「最善だけど最良ではないか？」

「でも、多くの人間を傷付けないのはこれしかないのよ」

砦で防衛戦をすれば味方は傷付く事無く勝つ事ができる。

しかし、相手は違う。良くて全滅、悪くて反逆者として刑に処される。

ちなみに反逆者として罰されるとただ処刑されるだけではなく、数々の拷問の後に処刑される。

「今はまだ誰も捕まっちゃダメなのよ」

リアはまだ何の力も無い王女だ。

もし、誰かが捕まっても免罪にするだけの力は無い。

「私が王都を奪還してその功績があれば……」

功績を足掛かりに権力という力を持つ事ができる。

「……レオ」

「大丈夫、被れる泥なら俺が被るから」

その台詞にリアは再び涙を流して嫌がるように首をしきりに横に振る。

「違、う。私はそんなつもりじゃ……」

「俺は大丈夫だから」

「そんな事無い……！ レオは泣いてたじゃない……！」

狂ったようにリアは声をあげる。

「ガリレクスに居た時に宿でレオ泣いてたのよ」

宿でレオを起こしに来た日、リアはベットで寝ながら涙を流していた姿を見ていた。

「レオ、私はあなたに傷付いてほしくない」

リアの言葉にレオは悲しそうな表情をして応える。

「……昔、守れなかった人達がいるんだ」

「守れなかった？」

「そう。誰にも負けないように、誰にも貶されないように、誰かを護れるように強くなったはずだったのに」

懐かしそうに目を細めてレオは遠くを見る。

「結局俺は誰も護れなかった」

悲しそうな表情から一変、怒るようにレオは顔を歪めた。

それは自分の不甲斐なさを表したモノだった。

「それどこか俺は逃げ出した」

その日の自分を観ているようにレオは空中の一点を睨み付ける。

そんなレオの手をリアは優しく両手で包み込む。

「レオは悪くないわよ」

「……今でも夢に見るんだ。あの日の光景と真つ暗な闇を」

大切な人達を護る為に強くなった。

しかし、実際は護る事も出来ずに逃げ出す事しか出来なかった。

何故、何故、何故、何故、何故、何故、何故、何故、とレオの

思考は壊れたビデオのように繰り返し再生される。

「今のレオは違うわ」

リアの声にレオは後悔の泥沼から引き上げられる。

「初めて会った時も騎士に追われていた時も森で騎士団に追い詰められた時も守ってくれたじゃない!!!」

リアはレオに救われた。

だから、今度はリアがレオを救う番だ。

「今もこれからも無力な私を護って。レオ」

この言葉にレオは救われ、覚悟を決めた。

今度こそは護り抜く。

レオはそう心の中で誓ってリアに礼を言った。

「ありがとう。今は戻って明日に備えよう」

リアは頷き、先に皆へ戻ろう歩き出したレオの隣に寄り添った。

これから約六時間後、レオ達は出来るだけ多くの人間が傷付かないように傷付く戦いを始めた。

## 第八話 叫び（後書き）

最近新作を書き始めて方向性にちょっと悩んでいます……。

投稿が遅れたのもそれが原因でもあります。

けれど、頑張つてこの作品を続けようと考えているので次の話も読んで頂けると嬉しいです。

誤字脱字あれば連絡を頂けると幸いです。

## 第九話 反撃（前書き）

更新が遅くなって申し訳ないです……。

定期試験が近くてまともに書けないのが理由です。

……十七教科はマジ鬱です。

誤字脱字があるかもしれませんが、読んで頂けると幸いです。



## 第九話 反撃

真つ黒だった空が瑠璃色に変わり始めた頃、シユク砦内部は静かだが慌ただしく人が行き来していた。

「第六小隊から第十小隊までの第二中隊は待機、砦の防衛だ!!」

「馬、馬が足りないぞ!!」

「矢の補給はどうなっている!?!」

「開門の準備は!?!」

色々な言葉が飛び交っている砦はまるで市場で競りをしている商人にも見える。

レオは独り自分の装備を確かめながらその光景を懐かしそうに見ていた。

「レオ」

凜とした声にレオは振り返る。

「ウィーナどうした?」

「少しいいでしょうか?」

「別に大丈夫だけど」

返事をしてレオにウィーナは付いて来て欲しいと目配せする。

レオは黙って頷き、後に続いた。

「で、話は?」

人の居ない廊下で立ち止まったウィーナに話しかける。

「……レオに頼みがあります」

「頼み?」

ウィーナが申し訳無さそうな表情で言った言葉をレオはそのまま聞き返した。

「レオには一足早く砦を出て欲しいのです」

その言葉だけでレオはウィーナが言おうとしている事が理解出来た。

同時にウィーナが不安と悲しみを織り交ぜた顔をしている意味

が分かり、レオは暖かな気持ちに広がる。

「勿論、最初からそのつもりだよ」

「……レオ」

「ウィーナは指揮官だ。利用できるモノは最大限使う義務と責任がある」

「すみません。でも、私はっ!!」

そこまで言って悔しそうにウィーナは言葉を止めた。

「ウィーナは正しい」

「でもっ、私はレオに死ねと言っているのですよ!!」

ウィーナは苛立ったように大きな声を出す。

レオはそれを首を横に振って否定する。

「俺は死なない」

「根拠がありません!!」

ウィーナはレオの言葉を真つ向から否定した。

それは当たり前だろう。いきなり死なないと宣言されても何の根拠も無く信じれる訳ない。

ウィーナの台詞を予測していたレオは真面目な顔で話を続ける。

「いや、俺は死ねない」

決してふざけている訳ではなく、真剣にそして真摯に言葉を紡ぐ。

「誓いがあるから俺はどんな事をしても生き延びる」

その台詞を聞いたウィーナはこの人はどんな騎士より騎士らしいと感じていた。

何故なら、騎士とは誓いに生きて誓いの為に死ぬという者だからだ。

今の時代、そんな考えを持つ騎士が幾人居ようか。

「わかりました。もう謝る事はしません」

「ウィーナ……」

「しかし、心配はします。死んだら怒りますよ」

「ああ、ありがとう」

礼を述べたのと同時にレオはウィーナに背を向けて門に歩き始めた。

「本当に怒りますからね」

小さな声でそう呟いたウィーナの顔はまるで恋する乙女のように真っ赤になっていた。

レオはウィーナと会話した後すぐに砦を一人出て木などの影に隠れながら敵陣に近付いていった。

敵の数は最初に見た時よりかなり減っているが、自陣の七倍はざっと数えて居る事を確認したレオはまず見張り役の場所を把握しようとする。

木組みの物見が五か。

横一列に等間隔で並んでいる物見の一つに狙いを付けて音も無く忍び寄る。

「はあ、なんで俺がこんな事してんだよ？」

「ぼやくな。これが終われば金が貰えんだ」

物見には二人の傭兵が居るらしく話し声が聞こえてくる。

レオは細心の注意をはらって物見に登る。

「ダルいモノはダルい」

だらけている傭兵の後ろへ瞬時に移動する。

「ん？」

気配に気がついた傭兵が振り返ると同時に補助武器として持ってきたナイフで喉に深く突き刺した。

「あっ！！」

「どっし」

もう一人が異様な気配にこちらへ近付こうとした瞬間、首と胴

体が永遠に離れた。

「…………ふう」

まずはうまくいったため息を吐き、二本のナイフを取り出して隣の物見に投げつける。

隣の物見までの距離は五十メートルほど離れているが、レオはそれを物ともせず投擲をした。

残り三つか。

暗闇でも良く見える視力を持つレオは隣の物見に居た見張りが倒れるのを確認すると物見から飛び降りて走り出す。

次の物見に着いたレオは同じ要領で見張りを殺し、そこからの投擲で同じように隣の物見に居た兵の息の根を止めた。

「あと、一つ」

最後の物見に気配を消して近付き、駆け上がって見張りの兵士を一息で殺した。

後はウィーナが手はず通りに夜明けと共に奇襲すれば相手に大打撃を与えられる。

そのはずだった。

「誰だっ!？」

「っ!！」

役目が終わって気を抜いたレオは背後から近寄ってきた兵士に気がつかずに接近を許してしまった。

「くそっ!！」

振り向き様にナイフを投げて殺そうとするが。

「ぐあ!!! て、敵襲っ!!!」

突然の事で狙いの定まらなかったナイフは相手の左肩に刺さっただけで息の根止めるには到らなかった。

ナイフが刺さったままの相手を慌ててレオは紫竜で斬り捨てたが、時は既に遅く辺りの兵は慌ただしくレオの居る物見に集まって来ていた。

レオは舌打ちをしながら持っている全てのナイフを取り出す。

「やられる訳にはいかないっ!!」

後少しでウィーナ達が来るといつてもレオ一人で七百人の兵士達を相手にする事は不可能だ。

ましてや、今レオが居る場所はほぼ平原と呼んでいいほど障害物が少ない。

そんな場所では圧倒的に数的有利な敵の方が勝つに決まっている。

「まずは二人」

レオは両手に持ったナイフを投げて勢いよく物見に走ってきた兵士二人を殺した。

残りのナイフは四本。

「今はまだ使えないか」

呟いたレオは助走を付けて物見から大量の敵がいる大地に飛び降りた。

「シッ!!」

着地点に居た兵士を居合いで首を斬り落として着地し、同時に体を円形に一回転させて近くに居た兵士達を斬った。

レオはそのまま動きを止めずに正面で啞然としている兵士の腹を蹴り飛ばした。

「がはっ」

蹴り飛ばされた兵士は何人かを巻き添えにして五メートルほどで止まった。

兵士は鎧で体を護っていたが、レオの蹴りが当たった部分はくつきりと足の形に陥没していて無事ではない事が分かる。

レオは蹴り飛ばして出来た隙間を縫うように駆けていく。

マズい、数が多すぎる。

走りながら数人斬り捨てたが、相手の数は一向に減る気配がない。

「うおおお!!」

「敵は一人だ、殺せっ!!」

雄叫びと共に兵士が数人斬りかかってくる。  
それをレオはしゃがんだり体を反らしたりして避け、刀を振るう。

熟し過ぎたトマトを地面に叩きつけるような音と短い絶叫が虚しくこだました。

「ちっ、はっ!!」

四方から斬りつけてくる敵に避けては斬って、斬っては避けてを繰り返して少しずつ数を削っていく。

重騎士は機動力の問題で居ない。弓兵は味方が多すぎて矢を放てないか。

戦場を分析しながらレオは時を待つ。

「ひいい!!」

「化け物だっ!!」

レオの嵐のような強さに数人の傭兵らしき人物達が剣を捨てて逃げていく。

「貴様等、逃げるのではない!!」

その様子を見ていた騎士が慌てて制止させようとする。

「アイツか」

命令していた騎士を戦いながら確認する。

その騎士は明らかにレオと戦っている騎士達より頑丈そうな鎧を着ていた。

「邪魔だ。どけえっ!!」

周りにいた兵士を一瞬で切り刻み、残っていたナイフを命令していた騎士の顔面に投げつけた。

「あがぁ……」

ナイフが突き刺さった瞬間、何とも間抜けな声を出して騎士は絶命した。

「だ、大隊長!？」

周りに居る兵士達の顔色が真っ青に変わっていく。

それを見てレオは自分が考えた事が正しかったと悟る。

レオが考えた事とは、正規の兵士ではない傭兵を部隊に入れている時点でそれをまとめる隊長クラスが騎士が必要である。

もし、その騎士が何らかの理由で指揮が出来なくなる。そうすると、まとめ役の居なくなつた傭兵と騎士達はどうなるか。

「やつてられっか!!」

「おい、貴様等」

「騎士だからつて上から見てもんじゃねえ」

「とんずらするぞ」

「ま、待てっ!!」

指揮をする人物が居なくなつた彼らは烏合の衆と化していた。

が、この作戦はほとんど意味がない事を知っていた。

理由は殺した騎士が指揮官ではないからだ。

「この規模だと大隊長が七人、それをまとめる連隊長が一人か？」

大隊長とは百人からなる大隊を指揮する役職で、連隊長とは千人からなる連隊を指揮する者だ。

ちなみに、連隊の上には三千以上から旅団がある。騎士団はこの旅団が二つ以上ある組織の事を言う。

ウィーナ達が少ないのはシユク砦に居る理由が訓練で、騎士団のほとんどがグネルヴァに居るからだ。

レオは混乱して邪魔な兵士達をなるべく殺さないように蹴りや投げ、峰打ちで叩きのめしていく。

「っ!!!　そこまでするか!？」

十数人を気絶させたレオは逃げ惑う兵士達の隙間から見えた光景に絶句する。

そこには弓矢を構えた弓兵が五十人ほど列を作って並んでいた。「放てっ!!」

隊列の横にいる小太りの騎士が命令すると同時に矢を引つ張っていた手を離す弓兵達。

それを見てレオは焦りと怒りを覚え、とつさに叫んだ。

「仲間を見捨てるのか外道!!」

レオの周りにはさつきまで戦っていた騎士や傭兵がまだ沢山居た。

それを無視して矢を放つ事はレオにとって腸が煮えくり返るような気分になる。

しかし、レオ個人の力ではどうする事も出来ない。

レオは怒りを理性で抑えて、飛んでくる矢に集中する。

「ハッ！！」

矢が降り注ぐ瞬間、レオは紫竜で空中を薙ぎ、矢を斬り落とすた。

だが、それだけでは全てを防ぐ事は出来ない。

レオは頭と胸、腹以外の防御を捨てて避けたり紫竜で防いだり腕で守ったりしてやり過ごした。

「いつつ、今の内に」

左腕に二本、右太腿に一本、右肩に一本、それぞれの場所に刺さった矢で激痛が走る体を無理矢理動かしてレオは三秒ほどで小太りの騎士の居る所に移動する。

「ひっ　！！」

冷めた目で紫竜を振るい、相手の膝を斬りつける。

「いだいいい！！」

不快になる声に眉をひそめたレオは無言で騎士の肩に紫竜を突き刺し、手首を捻る。

「アアガアアアア！！」

戦場で敵をなぶる行動は時間を無駄にしているとしかいえない。しかし、レオは一連の動きを一秒ほどで行い、近く居た弓兵はその間動く事も出来なかった。

最後にレオは騎士の腹を全力で蹴り上げた。

「ぶひゅ」

気絶した騎士を横目で確認したレオは同時にそれほど遠くない距離から地鳴りのような足音が聞こえてくる。

「やっとか……」



日が東の空に昇り出して援軍が訪れた事に安堵したレオ。

だが、まだやる事が残っているレオはすぐに気合いを入れ直して紫竜を構える。

「敵襲、敵襲！！」

「弓兵構え！！」

「隊列を組めつ！！」

レオが起こした騒動により浮き足立っている敵はまともに機能していない。

逃亡と命令系統の混乱によって戦況を維持できるとは思わないレオは更に追撃をかける為に痛む体を酷使して弓兵の隊列に突っ込んだ。

それと同時にウィーナ率いる国王騎士団の第二中隊が前線に居た敵と衝突した。

そこから一時間後、グネルヴァ騎士団の援軍が到着し、ダルタニア騎士団は敗戦を余儀なくされた。

余談だが、矢の刺さったまま皆に帰ったレオはリアとウィーナに怒られるわ泣かれるわで戦よりも大変な思いをしたのであった。

## 第九話 反撃（後書き）

最近バトルしか書いてない気がする。  
そんな訳で次回はバトル無しでいきたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2795z/>

---

剣の民と華の少女

2012年1月14日03時48分発行